

107



序

書を讀むを添乳と云ひ又魔睡劑とも云ふされども  
 睡ると云ふ書に二品あるべし亦睡人にも二情ある  
 べし教科書類の難解に倦みて睡るは魔睡劑の功と  
 あすべく小説類の美談佳境に浮て魂を遊はしめ後  
 悠々と睡るは以て添乳の功と爲すべし此頃世に持  
 難さるゝ横濱三人殺しミルラー事件は我國內地雜  
 居最初の犯罪にして之れを御馴染の講演師邑井貞  
 吉子か事面白く雄辨を振ひ非常に高評を博して







又も自惚みからの老婆心より廣く世の人にも知らしめんと自記せしものゝれは出もせぬ乳をねぶりだゝをこねみから睡るの書と異あり傍假名も付しあれば漸くいろはを覺へし小供でも讀みおは添乳の功とあらんのみ。

明治三十二年初秋

上田屋編纂部に於て

硯 瀧 源 夫 藏

内地雜居  
最初犯罪

ミルラー事件

邑 井 貞 吉

自 講 自 記

第 一 席

エ、今回上田屋の御主人から御請求で何か珍ら敷走りの説物を  
書て呉舞かどの御注文で、今世の中に事變出來事も有せせんが取  
敢ず金港の三人殺し米國の水夫ロヘートヨルラーの公判記を講  
談として申上る、明治三十二年七月十七日は我同朋諸君の忘る  
ゝ事の出來ぬ記念日則ち改正條約の實施と云ふ當日です實に嘉  
永の年間幕府の未路に當り内憂外患の時に組ました條約を其儘  
に今日迄も押通されたのは甚な残念な事でも有せした尤其間には

井上大隈青木と能い大臣方が外務の椅子を預かりまして改正の運動をし、事は諸君の御肥慮では御座いましてやう夫かやつと本年の七月十七日から治外法權と云ふ鐵壁を打毀して我法律の下に外國人の犯罪を支配する事に相成ましたので實に喜ぶ可き當日に又悲むへき出來事は彼のミルラーの一件で有升七月十六日の御齊日は午后三時比から雨降まして中就て横波は強く五時四十分比には羽衣町へ落雷をした位いでしたが十七日の朝に成升と打て變りました程の好天氣瑠理を拭ふたやうな空、午前七時三十分夕部迄は居留地とばかりいゝましたのが今朝からは舊居留地と呼ぶ事に成ました百卅三番館の裏口から廿一二の女が顔の色を代へまして跣足のまゝで飛出し門番の小池桑太郎の處へ馳込んで来て と「チヨイト桑さん大變だよ人殺したよ早く来て頂戴な大へ……んで……」と舌の根も合す齒の根は元來屢さへ抜る

ばかり桑太郎も驚き周章てまして 小「人殺したと夫は大變だ嫌が殺されたのだ何處の内……」と「私の内……」 小「夫は猶更大變だ姉さんはどふしたへ」と「其姉さんと秋ちやんが二階で死んで居るのサ下に一人見た事の無異人さんが死んで居るので小「お前ばかりどふして助かつたのだエ」と「私は夕ア内に居なかつたサ 小「夫はまア僥倖といふのだ」と「ソナ事はどふでも能として私一人ヒヤア手が付られ無から桑さんマア来て頂戴を小「俺が行ても仕方がねへ夫ヒヤアねとめさんお前は歸つて番を仕てね出私に加賀町の警察署へ訴たへて巡査さんにでも来て貰ふ事にしやうけれ共死体へ手を付たり血を拭いたりしてはいけないヨ其儘にして置ないと探索の手係りに困るといふ事だからと「イヤだねエアノ血の中へ番を爲て居るのかへ 小「どうも災難だ殺されるより能いと断念をければあらねへサ」と「桑さん早く

四  
 巡査さんに来て貰つて下さい。他にこんな口が有ても跡廻しに  
 して……小「冗談を云つては往ねへこんな事がさう幾位も有も  
 のか……」と百卅三番館だけの門を締りをする又は夜廻り火の用  
 心を仕舞小池桑太郎は直様宙を飛んで加賀町警察署へ参りまし  
 て小「恐れ入升が御手敷を願ひ升 巡「何か 小「百卅三番のライ  
 ジング、サン、インの方へ盗棒だか何だか退入まして三人を殺して  
 往きましたので……」と此報に接するや受付の巡査は大に驚きて  
 當直警部へ上申をいたしましたから事客易あらずとて地方裁判所へ  
 電報して事情を告げ加賀町の警察署長碓山晋氏は上田警部と共  
 に中島、小松、鮫嶋の三刑事を督し巡査十五名を引連れまして百三  
 十三番館を銘酒店外岡か末方へ出張をなさいます、ト同時に  
 地方裁判所より宮島豫審判事検事正代理として堤、検事國分上席  
 書記奥田書記及び小宮、藤井、水島の三國手を従へて出張に相成升

五  
 るイヤ其近邊の騒きといふものは尋常ではありません尾張町通  
 りは人を以て山を築たりと思はれぬ程です查公は其雑踏を制し  
 て十五歩に一人廿歩に一人つゝ、行んで警戒する杯用意は周到で  
 あり升内には醫師三名が立合て調へ升ると土間の酒場の側に  
 倒れて居る被害者は米人にしてチルソン、ウオード十九歳に成る  
 者のよし上衣は縮の立縮にして黒セルのズボンを穿ち鼠色中  
 れ帽子は血に染みて長椅子の傍らに落ちてあり其身は東枕になり  
 て打伏したり傷所を改めるに咽喉部の左りに二ヶ所の突綻あり  
 て致命傷と見へたり左りの二の腕には剃刀の疵と覺しき物二ヶ  
 所あり鮮血彗星の如く走りて九尺程隔りし壁に刻て物凄き迄に  
 覺へぬ引起して見れば剃刀にて鼻を下から刺上りて形状を存せ  
 二階へ上つて見れば戸主外岡か末二十四は左の頬に小刃にて抉  
 られたる傷あり耳の下に銜傷あり左りの手の平には小刀を握り



六  
 し如き形状残り前歯一本を残して跡はなく面部は眼口の明らぬ迄に打きて天頭は二目と當られず前脳は二ツに成つて折れ居たり尤も前納二つといふのが當然です三ツと前納が来ると其貸家はとふも閉がらあいやうです鈴木お秋廿二と云ふは矢張腦蓋を碎かれて面部は不詳ならず鏡の棒の好き物品にて打しと思はれ三名共に頭部を碎かれて居るのは天窓さへ毀せば祟らないといふ蛇の事を人間の事だと覺へ違へたのかも知れませんが何にして三人共に多少格闘の結果倒れたと云ふ事は判然として居升降者三名が三人の死骸を改ためまして治罪法の假所分としたといふと大層体裁が能う御座い升が唯死体の上へ蓋を掛る事なのです夫でも字に出て見ると治罪法の假所分と來るから立派な物です其内に小松、中島、鮫島の三刑事は證據品を取調べに掛り升と下の酒場の腕に倒れて居るウオードの死体の下から出ましたのは二

七  
 ッに折れました西洋髪がたまはりましたが是切りでは無ろうと聞くと升と階子段の下の所に血に染んで居る縮みのシャツが有りましたから小松刑事が引張り出し升と鏡櫃の柄に血の附着して有るのが出ました中島刑事は洗面鉢と唱へ升物の中を見と水は紅に變つて居るし石鹸の使ひ掛が有のはいはずと知れた犯人が手の血染を洗ふた事を證明するので、鮫島刑事は壘所の下流しを見ると検櫛や藁の草束の下に鏡櫃の天窓の有のを發見されて續いて三角の鏡も出ましたが兇行用の兇器は掛つたやうです其證を宮島豫審判事の前へ差出し升其内に假豫審と外岡すゑの二階で聞く事に成まして第一の見證人たる田中留を呼寄せます

第二 席

判事が取調を敢る時に金淵の眼鏡の上から被告の顔をゴロリと

見るのは何となく凄い物です全体眼鏡の上から人を見るのは  
 河登に住んで居る人ばかりがと思ふとさうでも無と見へ升 宮  
 其方は當家の雇人か とハイ 宮何と云ふ と田中留と申升  
 宮産れは と東京市芝區金杉濱町三番地小山金八方…… 宮親  
 父の姓名は と親父は清兵衛といはしません夫れ今は死んで仕  
 舞たのです…… 宮清兵衛といはん姓名とは名の事だ死んだの  
 はなんでも能い兄は何と申 と田中勝二郎と申升 宮商賣は何  
 だ とみんな漁師です 宮茲の所へは何日頃に來たのじや と  
 本月の十二日です 宮とふして三人の死して居るを發見した上  
 其方一人助かり居るは不可思議千万じやナ とアラ旦那幾位私  
 が好でもろんちに喰べはしませんは 宮ナニを とたつてフカ  
 シ芋千本たべたと…… 宮イヤそふでは無不思議じやといふの  
 である と昨晚私はるすです查の内から用が有まして…… 宮

何處へ参つて居たか とハイアノ益の十六日の事ですから石川  
 町に居る伯母の許へ島渡用達しに行きましたら生憎の雨でどふ  
 する事も出来ませんから泊つて來たといふやうな工合なのです  
 宮夫は能い工合で有たの…… ソレ殺人罪を犯した者則ち外  
 未を憎み秋をも殺さんと決心するのは容易ならぬ事で有し上外  
 國人も一人死んで居るのじやが此犯人の目當か有かどふじや  
 とサア私もアノ人だろうと思ひ升けれ…… 宮此剃刀に見覺  
 へが有か と夫は夕部も店の長椅子に寝て居ました米人のミル  
 ラー四十九といふ人が持て居る物に似て居升けれ…… 宮夕  
 部泊つて寝た外國人が…… とハイ 宮確かに寝て居たのか……  
 と私の出て行時は確かに…… 宮其方は朝から石川の伯母の許  
 へ参つたと申たのが昨夜の事をどふして知つて居るのじや前後  
 無盾の事を申すな 眞言を申と爲に相成ぬぞ…… とどふも恐入

升 殿 實 は アノ 何 だ 誰 が 能 か ろ う と 思 っ て 居 る と 島 渡 ミ  
 な す つ て は 誠 に …… 仕 方 が 無 か ら 申 上 升 が 昨 夜 十 二 時 頃 に 店 の  
 長 い 腰 掛 に 寝 て 居 升 と 姉 さ ん が 歸 つ て 來 ま し て お 客 様 が 來 た か  
 ら 往 け と い ふ の で 實 は 泊 り に …… だ す か ら 其 迄 は ミ ル ラ ー さ ん  
 が 店 に 寝 て い た の で す 宮 鐵 槌 と 鐘 は 見 覺 へ 有 か と 其 鐵 槌 は  
 酒 場 で 氷 を 碎 す 時 に 遣 ひ 升 の で す 鐘 は 判 然 と は 覺 へ ま せ ん け れ  
 共 大 方 茶 算 筒 の 上 の 道 具 箱 の 中 に で も 道 入 て 居 た の だ ろ う と 思  
 は れ 升 宮 其 ミ ル ラ ー と い ふ 者 は 外 岡 す る を 殺 す 程 に 憎 ん で お  
 る 事 が 有 の か と ハ ア 左 様 だ ろ う と 思 ひ 升 宮 其 子 細 は と 今  
 度 尾 張 の 國 か ら 花 苺 を 賣 に 來 る と い ふ 噂 で す 宮 ナ ン ゲ ト と  
 で も 人 が 愛 知 花 苺 た と か い ました 夫 に 付 て 外 國 人 も 多 く 今 時  
 の 百 層 倍 位 は 此 横 濱 へ 來 さ う だ す る と 店 が 圖 か し く な る け れ ど  
 夫 に は 日 本 人 の 名 だ と 破 藩 戶 が 錢 貨 ひ に 來 て 盡 盡 から 誰 か 外 國

人 の 名 に し て 置 度 も ん だ 誰 が 能 か ろ う と 思 っ て 居 る と 島 渡 ミ  
 ラ ー さ ん が 來 た の で 其 晰 し と し た の だ ろ う と 思 ひ 升 が 是 は 私 は  
 ま だ 此 へ 來 ぬ 時 の 事 で す か ら 確 と は 分 り ま せ ん 爾 う す る と 最  
 初 は ミ ル ラ ー が 眞 實 ら し く 遣 つ て 居 た の で す け れ 共 段 々 と 疑  
 が 出 て 來 た ん で 内 の 姉 さ ん が 嫌 氣 に 成 つ て 來 た 處 へ 種 々 惡 い 事  
 を 見 升 の で 十 六 日 の 朝 に 名 前 人 の 事 を 斷 は り ま し て …… 全 体 姉  
 さ ん に は 外 に 且 那 が 有 ん で す 宮 日 本 人 か 外 國 人 か と 矢 張 亞  
 米 利 加 の 人 で す 名 前 は アノ …… ヲ ジ と へ ン と か い ました 外  
 國 人 か 徒 ら 書 を す る や う な 名 で す 宮 夫 は 今 日 本 に 居 る の か  
 と イ、エ 居 あ い の で す 何 で も アノ 硝 子 の 飲 の 石 の 上 へ 落 た や う  
 な 國 と 米 利 堅 と 職 園 の 有 る 國 に 居 る さ う で す 宮 ハ ア 何 か ビ リ ッ ビ  
 ン 群 島 の 事 で 有 う と さ う で し や う か ん か ら ん と か い ました  
 宮 其 方 へ 參 つ て 居 る の か と さ う だ と 姉 さ ん は 晰 し ま し た ッ け

宮「夫から苦情でもいつて来たのか」とさうでは有ませんが其人の名にして置うと手付かすに断はつたんです。宮「其時ミルラは如何にせしか」と大變に憤りました已が怪しむと思ふなら別に証文を入やうの何のと言いましたけれど姉さんが聞かせんもんですから夫なら預けて置いた刺刀を返して呉れといつて顔の色を變へて騒いだのです姉さんも倒れだと思つて刺刀を出して遣ると持て行きました。宮「此折れて居る刺刀はミルラの請取て歸りし物で有か」とさうもさうだと思はれ升……ト此邊で口白を纏めまして判事は歸り升る是と同時に上田警部は備山署長と相談をなして直に逮捕の手続きをするのですが本邦人と違ひまして手敷も掛り升假令は治外法權といふ物は撤去ても領事館へは照會をせねば成しませんから此事を亞米利加領事ドモール氏へ通知に及びまして同館付のポリスマン二名を引連れまして来て警察

では目の付てある破落戸である。ペイトミルラは百州大番館のモームス、カアチスの處へ居るといふ見込で有から小松島中島の三刑事は巡查を引連れて出張を致しましてカアチスに右の次第を言聞せ田中留を見知り人としてミルラの居る處へ来て覗いて見ると長椅子に長々と寝て居り升る有様。ト「アノ人で……」と聲のまだ口を放れさらぬ内に刑事方はどか々と踏込みましたかミルラ「其者は覺悟でもして居るのか又は丸で知らぬと云ふ事を外粧の心持か平然として起上りましたが如何に本人が知らぬ振をする積りでも犯罪の證據は悠々と残つて居るのは頬や咽喉に噛だ傷やら引掻いた跡やらが見へ升のは仕方が有ませ拘引状を出して警察署へ行と促し升と。ミ「宜敷行升私何も悪い事しません旦那カアチスといふ濟ませんがウイスキーを一杯下さるまし御氣の毒様で……ト快よくコップのウイスキーを飲

干しまして出て行升發つて居る人達がカアチスに向つて 刑  
 ルラーの所有品は有のか カハイ衣囊か一個預かつて御座い升  
 刑夫を出して見せる……カアチスの持つて来るのを開いて見升と  
 水夫の衣服外に飾りシャツが四五枚汚れた下シャツの如き別段  
 證據品と成べき物も有ませんミルラーの寝て居ました長椅子の  
 片脇に赤い毛布が押纏めて有ましたから何の氣なしに明けて見  
 ると其中から血染の点々として残つて居り升薄色のツボンを出  
 ましたのは誠に動かすべからざる證據品で有升 刑館主に問ふ  
 がミルラーは常住に此家を住居とするのか カイ、エ一度も疑  
 た事は有ません只衣服の囊の置處を貸して呉るといふ升からさ  
 ふで明問も有るので承知をして遣りました 刑何時歸つて来たの  
 ですか カ今朝の六時半頃で有ましたやう米人の水夫ハナシと云ふ  
 者に手を曳かれて大層に歸つて来まして突然私が表を明けると

這入て来て酒を出せと申升から大分酔つて居るやうだから止し  
 たらとふたと申と大變に立腹まして酒を出さなければ鐵砲で打  
 殺すといふ升からお前の鐵砲玉なら食てもいふと笑ひながら二  
 杯出して遣り升とプレナシとかバナシとかいふ男は飲ました  
 ミルラーは飲ません其内に連れの水夫は軍艦が出帆するから時  
 間が遅れると申て出て行きましたミルラーはシャツを着代座とい  
 ふ升から許して遣ると二階へ上つて寝て仕舞たのです酔つて居る  
 から面倒だと其儘に打捨て置ましたのです 刑其時に此ツボン  
 を踏いて居たか カ氣が付ませんでした……ト其處で一回は引  
 揚げました是迄の時間が僅か二時間四十五分程で有ましたるこ  
 一 我警察の敏捷を知らせるに足るので有ます  
 編者曰拘引と口候と遊にばあれと都合によりて斯は記した

ルラ | 事 件

亞米利加では死刑を執行するのに切で切るのは惨酷で有から流  
 動電機で殺す事に改正をしたのです其改正の最初に掛りました  
 のが日本人で有たさうです其御返禮と言では有ませんけれ共治  
 外法に無ありたる當日の罪人則ち日本の法律の御馳走はじり  
 か亞米利加人とは妙な工合に成つた物です被告者の外岡すゑの  
 履歴を調べて見升と静岡縣下駿河の國加茂郡稲梓村大字横川と  
 申す處の泊屋で土屋某と申者が父で御座い升母といふのは同郡  
 朝日村字加茂の外岡家の娘で知恵と申のであり升が此おちあ  
 といふのが草深い田舎には鳥渡譽られる顔付です處から中新田  
 の兄アや蛙ッ畑の牛太の眼にも掛り日待月待の席には必ず風説  
 の出あい事は無位あので両も大きに喜びまして行々は能い金

ミ | イ | 一 | 章 | 件

儲けに成ると云合て居る内に土屋といふ豪商から縁談の申込み  
 少し身代が違ひ過るからと辭退仕て見たが向ふも一人息子で是  
 非にといふ無理處望おちえの眼を探つて見るとダブリエー返事  
 彼處の御家おらばといふから月下翁に承知の返事結び納める帶  
 代も未長かれと書き吉日を撰んでの婚儀四海浪靜かにと終  
 砂に謠ひ終りて床盃の水波らさしと新枕夫婦の中至つて克く  
 月日に關守人もなく翌年の夏産の紐安々と解きて瑠璃の如き女  
 の子初めての子なれば迎お初と名付けて手の内玉簪の花と喜  
 ぶ内に又來る年に懐妊て女の子を産落しおかのと名を付たのは  
 夫婦共に酒を飲といふ記しで有たかそふだか女が二人有事だか  
 ら今度は世取の男の子が戀い物だと夫婦の寢癖し其内に又成の  
 日摸らむ五月願と男の子が戀い物だと夫婦の寢癖し其内に又成の  
 水の泡月と汐との落ち時にオギヤ一と一聲此世の風が當になら

ない神願み又も女が産れたのでさうも女の子澤山では恐れ入るからおすへと云ふ名を付けたのが此度の被害者南京おすへで御座い升まだ其上におちよとおどきと五人皆な女ばかりといふのも随分珍らしい子です家内に風波もなく世渡りは面白ふ糊口で居る内に天に浮雲地に霞霧鬼為世の中は寸善尺魔で良夫の某が不許風邪の心地より打臥しましたのが元となつて遂には歸らぬ旅へ立升る七日の待夜寺参り精進物の御馳走だと其當座は悲しく聞がしく日を経る内におちよは近邊の博徒の上傳と云ふのと通じ合ひまして土屋の遺産を擔ぎ出して二人して浮れ歩行くといふ有様田舎は物堅いのみならず不義の二人が破落戸では後々の爲になり升まいと親類の相談仕方が無から是迄の骨折賃として金の二百圓も遣つて五人ある女の子だから其内一番お袋の氣にも逢ひ娘も慕ふといふのを一人も付けて遣つたらいいだろう

と忽然評議も一決をいたしましたからおちよに右の断しをすると氣象と人目が無なれば結構だと願つて居た矢先ゆへ蛇も糸瓜の皮巾着へ二百圓の手切金もう再度は盡りません夫ではお言葉に甘へましておまへ一人を頂戴いたし升からと八才になる三女のお末を引連れまして一先實家なる朝日村宇加茂の外岡家へ戻りましてが實家にも親父は死んで弟が家督を譲られて別段天窓の懸へ人もなく我儘氣儘の日鐵業日髪赤い信女の歸り咲四十女の懸情は七ツ下りの雨とやら晴れて合引が出来無のが残念だと上傳への相談二百圓といふ金が土臺に有ならば何か一ツ打當て出世の出来無物でも無から夫には土地が狭くつては面白い儲けも無い荒い仕事に金を蒔く處へ出て稼いで見やう大江戸や唐辛賣計りてもと云ふから東京か横濱へ出度ものだと端緒を開けばおちよ聞て膝を打ち ち夫には大分能い事が有土屋さんの親戚の關

次郎吉さんといふ人が當時横濱石川仲町とやらで可也に糊口て  
居るとの事其處を尋ねて行たなら土地馴れた人の指圖を受たら  
どふにか成で有ましやう……ト二人の相談は頓に成り立おすへ  
を連れて三人旅女と子供の子の足弱い虫の歩行か盤の道ふ横濱の石  
川町へ尋ねて来れば直ぐ分る人入の下受請橋梁の普請や架換に  
は二十人三十人の日歴を腮で追廻し加へさせるの懐手で  
身體を野郎呼はり仕事も荒い格子戸の立てある御家ですと指の  
先から教へられて次郎吉の格子さへ義理に置たき草臥も草鞋  
の脱るが仕合せとハイ御免下さいましと上傳が先へ遣入れはれ  
ちゑも跡から次郎吉さんは御宅ですか静岡からお尋ね申てト同  
國の言葉詠りを障子内に閉て居た次郎吉は飛ぶやうに夕餉の膳  
を押遣りて出来り一目見るより愛愈よく 次誰かと思へば上田  
屋の親分とおちゑさんか宜く尋ねて来てくれたマア挨拶は跡の

事サアお上り……ト人を慕さぬ流石稼業も人受の女房のおよね  
も氣轉者よ毎度良夫でもお噂を……ト世辭さへ丸き盆の上に  
汲んで出す茶の愛嬌も醜る、ばかりの持執に傳吉おちゑも感し  
氣に傳縁て御承知でも御座いましてやうがおちゑさんを土屋さ  
んから頂戴を致しましておすへを世取といふ事にする處だけに  
は成ましたが今迄通の商業では満足には往く舞が途有て生れ故  
郷では眞逆に今迄の顔を賣る上田屋の傳吉が天秤棒も肩へは付  
かず眞逆にあれも眞逆にこれもと金太郎の家移ではなしもう眞  
逆を擔いで居る年でもなし何を傲るにも五六十里放れた處が身  
の修行とおちゑにも相談すると幸ひ貴殿の事を思ひ出して面  
無とを故郷へ置て生れ代つて出て来ました何分共に御計らひを  
……ト半分聞て次郎吉は 次夫はマア結構お思ひ付き波止場近  
所をふら付て石炭の粉を拾つても大身代になる横濱マア稼いで



御覽なさい……ト持たが病ひの世話好は夫婦共世間には妻物に  
なる人なるべし

第四席

座して暮せば山をも空し千兩八百十三年とは昔時の話言明治の  
時世十六七年では堅まつてこそ二百圓だが九尺二間の貸家一軒  
何が無とも竈に火鉢膳檜小鉢夜の具と揃へた處で三四十圓親子  
三人の身過にも稼ぐ道の多いだけに又錢の入る事も多く居喰で  
は溜る舞と次郎吉の周旋から女房は茶焙子場へ朝つから腰辨當  
傳吉は橋の工事や道路の普請に大勢と打交はつて負ぬ氣性は博  
奕打だけ働らく氣にも平常から盆菰の垢を奪て遊び半分稼業半  
分で墮落して居る上傳には三日と續けて働けず四日目には病氣  
で寐る女房のおちるるとても前後より日に照されて籍同様な一時

の惱みおすへ一人はかけ走り二人の間の手助けにと心掛はして  
見てもまだ九ツの徒ら盛り次郎吉が克く仕て呉ても素と他人の  
事にしあればさう度々はしてもくれず自然と有もせぬ物を喰食  
もするといふ焼腹紛れに傳吉が烏渡手出しをした賭博が旨く思  
つて二度三度十圓や二十圓は持つて歸るア、矢張是が早手廻した  
生れ付かも知られへト勝手な方へは付たがる理窟を楯に遊び廻  
り今日は埋地へ明日はまた程ヶ谷の半鐘象の賭場から報知を打  
て来たど奇偶の目から出る汗を末は已れが手へ握る物とは知ら  
ね凡夫の情二三年は夢となく過しに非す過されて壯んを喜び泰  
平樂の胡坐酒も奢る平家の様をさへ知らぬ儂は他から来た我身  
から出る錆刀腕力専務の無職渡世よる年波には鱧も立す碇を卸  
す當もなき艇の小舟と網島の子分の内の某へ頼んで貰ふた盃も  
水嗅い品行が有たどか無つたどか果は横濱にも居られぬ仕藝女

二十四

房には流石さうとも眠し兼てか 傳おちるや此二三度で隠く遣  
 られてノどうする事も出来ねへから國へ往つて少し許し無へ  
 が山と林を賣つて金にして来る積りだから一月程留守を頼む  
 ……ト軽く言置て出て往つた切りの旅雀お宿の事には心に掛ぬが梨  
 の磯の音沙汰も無身上の遣り練りも先の知らない無心も出来ね  
 ばおちるは類に心配の餘りが瘵の病となるは女の持前百草さへ  
 利かぬ心を取直しておすへと共に使ひ早間濯き洗ひや針仕事系  
 より細き身過世過けれとおすへはもう十四一廉役に立やうに成  
 つて居るのが心の樂しみ其内國の林も賣れ傳吉も出て来やうと  
 心配の類杖を火鉢にもたれて居る處へ這入て来た娘のおすへ  
 すお嬢さんや客様がお出ですよ ち誰殿が入らしつたのだ此お  
 汚る内へ……ト立出て見れば身形も立派な南京人鼻の下に入の  
 字綴の何處やらに見付ぬ眼には尊大らしく胸を突き出し左右の手

二十五

をぶら提て 波おかみふんです此娘誠に可愛らしむ私目を掛  
 て毎日のやうに何か遣り升今日途中で出逢ました娘が是非内へ  
 寄れい、升から来ました失禮ですが……ト隠袋から五圓紙幣を  
 二枚出しておちるの前へ並へましたからおちるは驚きましたの  
 は南京人だから言葉も中々分らない物だと斗り思つて居たのが  
 日本の言葉が分りますし刺さへ十圓の土産が眼に染ましたから  
 ち「チャさうで御座い升か克うこそお出下さりましたコン汚な  
 い内へ御寄下さい升のは有難い事で……賊に大したお金なんぞ  
 を頂きましてはとふも……すお嬢さん、取つてお、さよ  
 此南京さんは居留地南京町で評判の金持で波登さんといふの  
 ですヨ私が洗濯をして上げて居るので毎日出来た衣服を持って行  
 と私お嬢さんには云はあいければ半襟だのお小遣だのを下すつ  
 てさうふしてアノ私に……アノ……何あのだの……けれどお嬢

さんに相談をしてといつて居ると波登さんが一所に行うと云な  
ざるから連れて来たんだヨ出産をイ、エ貰つて置ても能ヨ  
夫じあア此旦那がひるきにして下さるのかへ夫はマア有難う御  
言葉に甘へまして頂いて置升る……と不自由と云ふ貧の敵に逼  
められて居る親子二人波登を神か佛のやうに「マアお上り」ト下へ  
も置すお茶よお菓子と世辭愛嬌も薄き數奇屋の前垂にかゝる赤  
繩は唐人の時に伏す畫圖の照君も斯は亂れん女郎花風に揉まる  
秋の空露置萩の折初て唐撫子の根じりめとは風情有べき床の置  
物と森らで烏波筆を置升

第五席

世渡る業の種々あれど人の妾と云ふ物は尤も人の忌憚へく増し  
て況や外國人の其中にまた排斥者の支那人の枕席の座を掃ふと

は情なき事とし思へと事急なれば鼻をも刺ぐ俗に云ふ背に腹は  
代へられぬと云ふ世話場から波登が送る月の極めもの十五圓を  
資本として葺屋店の開業も身上を煙りにすると云れあがらも此  
と見る石の一生懸命マア其日の食る事には心配の無い事にはな  
つたか母のおちゑは心あらず十四の子娘に旦那を取らせて安樂  
の加へ喜世留左り團扇も肩の張はけ吉さんの音信はとふで有  
かた再三再四人を頼んで手紙の促し待日は永き郵便の返事と聞  
けば上の空開いて見れば運い詮言虚か誠か白紙の前耻かしき言  
譯ばかり其内には是非迎いに行く故今暫時辛辛してとふ成糊口  
して居て呉ると頼みにならぬ事を頼みに迎ひといふこと樂しみ  
に今日か明日かと侍内に廿四年の十二月春待と云ふ世話場中を  
追ひの手紙に細々と漸次に酒屋の店を開きたればおすへ諸共得  
て歸れとの事なりければおちゑの喜び大方ならずお末に嘶して

家を仕舞一日も早く古郷へ行くと明けて見せたる手紙の行立  
 定めしおすへも喜んで國へ往かふと云ふだろうと思ひし事を思  
 ひきやで す「マアお爺さんの音信は何よりの事ですけれど此手  
 紙の様子ではまだ店に成つたといふでもなし漸次酒屋に成つた  
 から歸つて来いといふらしいし賣込迄の食込も並一通りの物で  
 はなし國へ往つたは又食へ無い稼ぎに來たは歸るは行くはと一  
 生こんな事をして居ては身の堅まる時が無い折角斯ふやつて内  
 も出來たし春の支度も波登さんが伊勢佐木町の上總屋へ跳へて  
 もくれましたし外にもお客が二人斗り衣服だ金だといつて居る  
 のを捨て爲ない親父さんを食倒しに往くのはどふも私の心に濟  
 ませんからマアお嬢さんが先へ歸つて古郷の様子を見た上で一  
 年でも二年でも食込の内の人減しは願つても無幸ひ同然其内私  
 も此横濱でどふも汚れた身体だからもう一杯稼いた上に漫位か

の金を持って國へ歸ると致しましやう夫がいゝでは有ませんか  
 ……ト人の思の奥底は親子の中さへ計り切れずおちかも今更の  
 やうに驚いゝかア、是は私が悪いのだ食ぬ衰さに子娘へ旦那を  
 とらせて稼がせたのは生地獄へ此親が自分が好んで追落したや  
 うなものだト心に決して ち「夫ヒやアマア此一春は私は國で雜  
 煮の箸を取りましやうお前も早く稼いだ上で古郷の姉妹兩人と  
 顔を見合せやうにおしヨ……と旅の入費をお末に貰ひ静岡縣下  
 加茂郡朝日村へ歸りましたサアおすへは跡に残つて小山の大  
 將已一人天窓の押人の無のが幸ひ手當り次第の旦那取南京おす  
 へと評判を取り五本の指に折込れる大々的の地獄となり多くの  
 人を欺した報ひが此回の出來事となり外國人の刃に掛り非業の  
 横死を遂るのも人を取る龜は人にとられ已の罪已を責るといふ  
 事で有ましやうか、閑話休題おすへは十四から廿弍迄迄爲事もなく

面白く無異消光と糊口うち進んで来るのは痴情の手管朋友といふ者は皆莫連な女のみ夜盡なしの遊ひ散舞勤めといふのは旦那の機嫌と錢を取るのと些少の間有は朋友を呼び集め花台の慰みやら人が揃はぬといふ内はチーハと云ふ南京博奕のフハと其名に知れて居る當にあら無題紙へ首ッ引して考へてもどふでも下主の知恵袋紋り取らせた財布の底に無が意見の惣仕舞と火鉢の角に思案の類杖目の寄る處へ谷戸阪のお玉がおぎんかかつの二人と連れて門口から無遠慮に 玉島渡と居るノ這入てもいゝかへおすへさん……ト咄囃るが如き割聲は云すと知れた稼さの結果が咽喉へ來たとの記念なるべしおすへも今胸算用の五玉を積れた心持して ず誰だエ失禮な人の門口で大きな聲をあげてサ五月で有て見なさい近處の貧乏人へ面當だよ 玉どふも失敬お前が金太郎見たやうに成て怒ると丁度機嫌の祝にはいゝ取合せ

といふのたろう……トとや々々三人高笑ひをしながら上つて來るや否哉貫入喜世留をかしてト挨拶もなくア、草臥たど序開きに話は夕部の客の噂さや情夫筋の情話の數々向ふが濟ば此方から水も向け無生口は巫子の集會かと思ふなるべしおすへは嘶しをしながら茶を入れて其處へ出し ず生憎お菓子かヤマに成つて居るから情夫賃として誰かお買使ひだけはしてやるから ぎどふも憚りさま かさう姉さんだつて情夫を……玉私は馬鹿な事をいふのしやア無が十五から二十八もう五十振袖といふ年だか一日も自分のマ、情夫だと思ふ人が抱へる事は無が未ちやん計りは是程近しく做て居るけれど無やうだね ぎ波登さんに惚て居るのだらう かアノ人が抑最初からの旦那で誠に懐中も温かひといんだから伶俐だけにお樂としあいでも錢溜主義だらう波登懐中を覗ふとは子供が觀音様へ往つたやうなものだ 末

三十二

かつさん馬鹿も休みながらいふ物だヨ第一波登旦那は先月の事  
 香港へ行つてしまて今じや手明きだヨ ぎさうだ子夫じやア且  
 那の候補者を探なければならぬのだ示今迄だつて波登一人じ  
 あア無のたろう す夫は一人じやア遣り操りも付は仕無サ夫で  
 も波登さん十五圓てへ士台だから樂も出来るのたが来ない極  
 ると島渡不都合だは…… 玉私共でも夫は覺へがあるサヒラの  
 マチを打いたり呼上げでは能事も有かはりには屹度取れると極  
 つては居ないから心細や子第一此方の身體が悪ければ資本が無  
 だもの 未私も夫と勘考たら何だか急に病人にでも成るやうな  
 心持がして變な事に成つて居るヨ ぎ馬鹿氣だネそんな事だ變  
 な氣に成つてまい私なんぞは始終變な氣で居なければ成らない  
 フ かろんお談話は止めてお酒でも飲うじやア無か 未お酒も  
 飲度無ワ 玉さう醜いでは仕方が無から芝居にでも往つて見や

三十三

うじやア無か 未くさくするから羽衣座へでも往うかと思つ  
 たけれを無一文で…… 玉誰か此中に紳士は居ないか子 ぎ徒  
 ら者なら居るだらうがトロメンは居ないだらう か皆なラシヤ  
 メンで有ながら 玉マアお喋舌で無ヨ五月蠅ネ夫じやアこふし  
 やう ぎア、さうしやう 玉何だネ住吉踊を見たやうに ぎハ  
 イ 玉新丸竹か新富竹へでも……つて落語か講釋でも聞て来やう  
 じや無か ぎうんな物より新富竹で例の濱の素人連の義大夫が  
 有てへから聞に往こうじやア無か か夫がお錢が入らあくつて  
 居いリ 未下主張つて居るネけれど夫が屏張なくつていゝかも  
 知れ無往かうか子 玉さうおしナ内へ島渡おぎんさん馳出して  
 往つて断わつておくん義大夫を聞に往くからつて…… ぎ  
 ハア……トおぎんは出て行跡は支度のこと付き中おぎんが歸つ  
 て来るのが合圖にお持参さまとおすへの腰四人連で出かける門

へ姉さん何處へ義太夫へアライ、事私も一緒に行度……トお  
松お政お時の三人夫に七人の大連とは成つたり

第六席

義太夫節といふ物が近頃は大變に流行初めまして横濱の新丸竹  
亭といふ勸業場の上の席は柳家小さんの看板の外誰か行つても  
餘りお客様が來ない寄席ですけれど夫が素人淨瑠璃の天狗連だ  
といふ客止の大景氣ですから毎度講釋師落語家でも新丸竹が  
素人義太夫だと開升とヲヤ厭な合人だといふ升ので、夫に義太夫  
さんが稽古をして居たのですから素人とはいへない程の功者に  
語るお仁も有升し又旦那方で大勢の中で語つて見度といふ連中  
が「今夜は僅に太功肥を是非聞に來てくれ假令どんな用が有ても  
來てくれ無れば借た金を歸して店を明けて翌日中に立退けとい

ふやうな歴制的の談判を喰ふのですから據るなく出て行升連が  
連を誘引ふ大混雜木戸札は始終音が止りませぬ満場立錐の地も  
無といふ蓋梅に成りましても簾内の御祝儀物橋辨慶が切れて口  
二枚といふ處でも義理の客待が有ので高座の間が隙の居るのは  
木戸が安いのと粗景呈上で埋合せに成つて居るので苦情もいわ  
すがや々々する内報知の拍子木東西といふ口上にしてメントす  
るだけが御客の眞價其癖藝題は祿には聞へず始まり左様と木を  
刻めば三味線引は重々しく落付顔の前引に太夫は茲う一世の大  
事と腹帯のペやうが些上過たど高座で身問へ置上るりからコハ  
リ聲で一問へころわと紙半分語つて居る内咽喉に蓋が出来たや  
うな心持熱湯を飲むから汗が出るサワリへ掛れば見物からヨ待  
て居ました下いわれるだけ旨く遣らうの觀念から手前勝手な  
を語れば三味線のツボへ戻らず周章で先のヤマを當んど太夫は

少し馳出し氣味に合の手さへ待てはそれぞ互ひに追かけつゝ  
 跡を慕ふことの半段切聲が下りるを待て居ましたなんど又黒人  
 風の冷評やら師匠へ上つて二ヶ月め克くあれだけ遣れ升子ト  
 は知己人の懇言葉其内に又口上は現角誰しも受させだかる競  
 から割藝題の物が多く功者は短かく下手は長く夫でも流石に深  
 く成る程場敷を踏みし半晒落物や朝湯で開れぬ大念佛と新陳代  
 謝出る内に鳥渡耳立語り口出し物さへ色氣のあるれろめ久松  
 崎村船の別れの連引に花々敷段切は素人と珍ら敷何處の人かと  
 諸方の噂さおすへをばしめ七人連の女組も外は思わす銀か玉  
 姉さん今出た人は聲はよし男振りも立派也私ばアノ人に岡惚と  
 したは……ト此社會の習慣ではれたはれたは常位の云草 玉真  
 實に浮氣はい子だよ併し今夜出た内で遊んで見やうといふのは  
 今の人ばかりだ子 銀姉さん私もさう思つて居たは……子ト十日

の見る處多くの人の指さす事も知らずに喫舌つて居る内に東西  
 といふ制し聲に 銀ヲヤ叱られたヲ、怖いと漸々静かに成間も  
 なく今夜の大切と致しましてと斷り付の長口上は三味線物の堀  
 川どか兜軍記の三曲トお客を立せぬ六滔三略跡は景物の鏡が御  
 見當おすへの連中七人はア、面白かつた草臥たト伸を仕ながら  
 前垂の煙草の塵を拂ひツ、階子の段を下りては居れど心は跡へ  
 残るのは物は野崎の曳船に御客は本戸へ出方は樂屋別れ々々に  
 歸るのが寄席の當然世間の道理と勝手に地口つて見た所で獨り  
 言なら聞人もなし表へ出ればお去らば去らば外の連中に袂を分  
 つて百十五館に外岡おすへは居た頃の事故一人り茫然返つて來  
 て居つて見ても寝てみても夢幻しの如く彼の人の顔が眼先にち  
 ら付いて片時放れぬおし鳥の思ひ羽重き懸衣今夜も行つて様子  
 を見やうと暮れぬ内から化粧して外のを聞のは難義だが能ぬ堪



を人に取られてはといの一番の下足札も上る階子は檀山山の変  
 思ひとは籠内でも面當がまじき須摩の浦今夜の勿も舎人の別れか  
 ア、嫌ナ辻トだと人には何と岩橋の絶ぬ思ひを懸千鳥血を吐く  
 程の上るりも他の人の耳へも入らず夕部の人の出よかしと待  
 て居る恨みの絞鞘鰻谷の段どの口上に素人でも妻八を遣る位で  
 は是は少しは聞るだろうと膝立直せば定連衆も英一番の清香さ  
 んだ是が今夜の聞物だヨト初めぬ内から響聲を掛られるおすへ  
 は心嬉しく其人を拜み度程の心持「降座敷に引出す」と三下りの階  
 り出しに「ン」として水を打つたやうお半の書置といふ所では天  
 窓を上げる客もなく無駄口打く野次馬も涙を拭ふ手に闇がしく  
 段切れ迄の大喝采耳も聳せん拍手の音は南京花火の如くなりし  
 おすへは猶更思ひを増し何處の人かと聞見たれば 甲香さんは  
 功者だチ、乙素人とは思へ無頼に鰻谷なんぞをあア旨く語る物

は太夫にも有升まい……ト嘶す様子を聞て見ると英一番なるチ  
 ヤアチン、マゼソンの店にホーイをして居る石倉香太郎だと知り  
 し故に大喜び 末當人が呉服屋の隠居だとか料理店の主人では  
 身の謙遇た外妾風情云よる事も六ツかしいがホーイなら何の事  
 た心配なしト先の極めて香太郎が汗を拭き樂屋口から「左様なら  
 ト合抄をして出る處を一生懸命の覚悟で 末鳥渡と清香さんも  
 う歸るのですか石倉さんと呼かけたり

第七 席

遠くて近きは男女の間と水ゆく船だと清少納言が云ましたと世  
 の中に傳へ升が懸といふ程浮世の内に恐る敷物は有ません唯見  
 た時は一日でも逢て談話さへすればいと扱逢つて見ると  
 逢ひ見ての後の心にくらぶれば

ひかしは物をおもわざりけり

で一日顔を見なければ物足らぬやうな心持が致し丹おすへは石倉香太郎と情を通しましてから商法も手には付かす二人並んで見よかしに遊んで歩行くが無上の快樂朋友にお楽しみといわれるのは金鶏勳章でも貰つた程の心地併し遊んで居ては喰られませんか三月ばかり立升ると少し野暮の咄しも交つて来る火鉢の差向ひ 末「子エ香さん今夜は少し野暮晰しを仕なければなら無のサ 香「そんな事だへ 末「こんな事はお前さんの耳へ入れ度も無ければ女の前が一人の勤考には行無のサ 香「ア晰しを先へして見なければ分明無や子膝とも談合といふ事が有ければ膝よりは私の方が少しは役に立たろうと思ふは膝ならば能い知恵の出た時に打く丈の役にしか立は仕無から子エ 末「他の事じやアないければお前さんと斯う成つてから毎晩歸つて来てくれて

英一番へ通つて呉るのだから私の身分にはいふ所は無のサ 香「私逆も今迄とは違つて錢も入らず交際も張らずだが今迄の借金があるで今の處じや幾位身上の助けが出来るといふので無から氣の毒だと云つて居るのヨ 末「さう咄しの腰を折つて仕舞なくともいいサ私も随分道樂の揚句だから苦しい借金が有からのと夫を苦にするのじや無ガ子香さん此間の談話は嘘じやア有まのサ 香「此間の談話とは…… 末「サア夫だから私が心配をするのだヨ 香「夫でも途急かしいから忘れて居るのだ話して見てくんな 末「夫じやア云ふが子アノ女房にして呉ると云つた一件サ香「馬鹿事今時分に成つて…… 末「夫じやア嘘かへ 末「何うじやアねへ氣が早やいなもう成つて居るじやアねへか 末「成つては居るサけれ共是では私が覺束ないワ 香「ナゼ…… 末「だつて勤考で御覽なお前さんが取て来る給金じやア家庭の係に引

足り無し店へは石倉が居る香太郎が亭主だと知れて居るので知  
 つた客は亦す呼に來られてもお前さんが夜は内に居るんだから  
 放れて出て行のは嫌だしといふ都合だからとふしても内の財布  
 が足り無勝でキマアこんな事も言度は無ければ香に腹は代へら  
 れぬから打明けて云ふのだから腹を立ては嫌だよ 香が驚る  
 やうな事無がとふ仕様といふんだ 未お前さんの云つて呉れた  
 事が誠實なら末を樂みに仕様といふ氣が出たのサ今斯うやつて  
 居ると自然と自滅の外は無から一度表向だけ別れてキ土曜日に  
 來て泊つて日曜一日遊んで歸るてへやうにすれば夫程世間へも  
 知れ舞と思ふのサされと茲の内ではもう知れて居るから引越し  
 仕様と思ふのサ 香夫はエ、噺あしたが何處かに家が有のか  
 未實は内證で濟ないけれど探したのサアノ百四十九番館の獨逸  
 人でエー、キタといふ人の持て居る長家が一軒明て居るのサ其

隣家が其處の差配人をして居る島藤繁太郎といふ人サ其人に逢  
 て聞たらばアノ内は此間迄飲食店で能い客の付て居た内だから  
 お前さんが來て少し骨を折つたらば直に先の店位には成だるう  
 しました金が足り無のなら拾圓や二拾圓なら都合もして上るから  
 降りへ來たらとふだ云つてくれるのサ私も明た口だから夫と  
 やア二三日内に上り升から何分願ひ升といふと島藤さんがマア  
 内へ歸つて石倉さんにも相談をして能いと成つたら出て來なさ  
 る……お前さんの事を知つて居るのヨ私も嬉しいやうなかし  
 いやうな變な心持で島藤さんに別れて來たんだが香さん此勘者  
 は悪いカネ 香悪い理由が無やナ夫とやア一緒に往つて島藤と  
 云ふ人に逢つて頼んで見やう……ト飯を食了つて二人連れで島  
 藤繁太郎の家へ來て相談をスルト何が扱世話好の島藤は二ッ返  
 辱で直様家移りの示談當座の入費を島藤から借りて百四十九番

館へ移りました。當座は石倉もおすへも委は餘り見へません。し  
 たがどふも痴情といふ位ですから。こんな伶俐な人でもアノ道は  
 仕方が有ません。風が吹くから。晩に歸つて来てくれ。雨が降るから  
 淋しいから。泊りに来い。夜はくらくら。是非来いと種々な口實  
 を付けて。矢張始終泊り込んで居るので。店はどうも繁昌の上へ不  
 の字が付ので。一時の間に。合せて。利の高いお金を。借りて。其穴を埋  
 るから。又其穴より。又大きな穴が。後へ。明き。升理切つて。仕舞積りで  
 すが。中々。埋りません。小石川の水道。鐵管も。宜敷といふ。工合で。どふ  
 しても。仕方が有ません。おすへも。萬更の愚女でも。有ません。から。一  
 刀兩斷と云ふ。事を。しな。ければ。往かん。など。思案に。沈む。折柄に。お川  
 ですか。ト。這入て。来る。のは。差配人の。島藤。繁太郎。なり。末「ヲヤ。島藤  
 さん。能う。お出で。サア。お上り。下さる。……」島「餘り。隣家と。云ふ。遠方  
 だもの。だから。了。不。佐。法。をして。どふも……」末「私の方から。往か

ければ。成ら。い。のです。が。相濟。ません。先月の。家賃も。遅く。成。まして。……  
 ……島「何に。し。る。拾。三。圓。といふ。の。だから。骨が。折れる。日。俺も。飛。だ  
 所を。周旋。をして。氣の。毒。な。事。をした。と思。つて。居る。の。た。けれ。ど。已。も  
 悪。かれ。と。云。つ。た。ん。じ。や。ア。無。が。ど。ふ。も。仕。方。が。……」末「ど。ふ。し。て。飛  
 ん。だ。御。心。配。を。掛。け。ま。し。て。何。皆。私。が。悪い。の。です。根。が。馬。鹿。だ。から  
 です。ヨ。島「う。ん。な。聞。遠。へ。を。して。吳。て。は。困。る。ヨ。何。う。ん。な。事。じ。や。ア  
 ね。へ。實。は。此。館。の。持。主。の。リ。キ。マ。さん。の。い。ふ。の。は。本。年。七。月。十。七。日。か  
 ら。改。正。條。約。の。實。施。に。も。なる。から。此。家。の。根。繼。を。して。奇。麗。に。仕。度。か  
 ら。外。岡。さん。に。断。し。を。して。明。けて。貰。つ。て。くれ。ぬ。か。とい。ふ。の。サ。種。々  
 とい。つ。て。は。見。た。が。知。つ。て。の。通。り。外。國。人。の。事。だ。から。云。出。し。た。ら。ば  
 自。分。の。事。計。り。を。い。つ。て。人。の。云。ふ。事。杯。ぞ。を。聞。ない。の。で。誠。に。氣。の。毒  
 な。けれ。ど。一。時。何。處。か。へ。立。退。て。貰。は。な。けれ。ば。あ。ら。ぬ。事。が。出。來。し。た  
 の。た。が。ど。う。た。る。う。致。か。ら。棒。で。何。れ。も。氣。の。毒。だ。が。……」ト。突然。の。店

立別段家賃が溜つた爲にといふ理由では無ければ急に來たのだから實はおすへも驚りしましたが是迎も仕方が有ません此事を香太郎が歸つて來たから相談をすると香太郎も仕方が無わサ又引移りとしやう併し假令にも覺足三文といふから度々は随分恐れるナ末今急に家を探すといつても有舞し八十一番館の牛の乳商の中山松之助さん處の二階が明いて居るからと云ふ晰しが有から一時の立退と仕やうじやア無か……ト相談も願に極まりまして百四十九番館を引拂ひ八十一番館の中山方の二階へ引移りましたのは卅二年三月の中旬の事で御座いました

第 八 席

世を經るといふ事は六ツかしいと思へは思ふ程に面倒な物で有升ければ賤められても口さへ糊してさへ往けば能いといふ心算

ならばそんなに驚く事は無物です俗にいふ生類に餌なりです中「おすへさん鳥渡相談が有んだ二階と下では咄しが遠過るから鳥渡下りて來て呉ないか……末何ですへ中「ア此邊へお出少し咄し度事があるのサナ」外の事じやア無家の事だが百四十九番館の差配の島藤さんに途中で此間逢たから根柢はどふしたエおすへさんを待て居るがと云ふと島藤さんの云ふにはまだ急には係りさうも無からおすへさんに百卅三番に明いて居る處が有から晰して遣つて呉ろと深切に云ふから私も歸り道の事だから通ふて見ると中々能い家だし身体だけ持て往けば住るやうな工合い持て來いだと思つて直に相談だ一日でも此節のことだから又直く閉かつたと來た日には歸ら無から是から往つて見たらどふたい尾張町通りては有し鳥渡奇麗首の二人も生捕つて鉢り物にして置たら能ろしと思つた早い勝たから……末と

をも有難う御座い升夫しやア往つて見て來ましよう……女房か  
 口を出して 女開化の横濱に居てそんな事をいふと笑われるだ  
 ろうかおすへさんには茲の内から尾張町の方は暗剣殺に當りは  
 仕舞かと思ふよ 中またお前は無駄をいふセナセ九星とか天元  
 どのといふ物を政府で許して置くかヤレ三碧に何か賭つて九紫  
 一生たか四祿を五黄へ道樂をしたのと口續けたセなんとアン  
 ケン殺たど香港の錢か聞て厭れるは夫は二百日以上居た處から  
 取る方角で何も一ヶ月や二ヶ月居た位の處から取る方角じやア  
 無のたけれど厭たと思つたらお止よ争われない事も有から 末  
 何そんな事は構いわたしませんし第一貸して呉るか呉れ無もしれ  
 ませんからマア往つて見て置ましやう……ト本月の出来事と引  
 出すへき端緒にて百卅三番館なるライレク、サンインの家を借  
 りに往きましたたのでず處か噴しも早く纏りましたたので石倉香

郎にも嘸し中山松之助と三人三鼎足て此度は余り星を繁く狂か  
 んやうにと他人か這入ての相談か整ひまして五月の初旬に引移  
 りましてサア稼く女を二人斗り捜し度と苦心をしましたけれど  
 生憎女か弗底て桂庵の五六軒も頼んであるのてすけれど連れて  
 も奈ません其内に或人の世話て二借か廣く明て居るなら置て上  
 て下さる食料の處は直接に嘸して下さると米國の水夫で何某と  
 云ふ人物を置ましたたが少しも食料は拂つてくれませんし剩さへ  
 旦那でも有やうに世間には思はれ香太郎にも嫌味を云れるし迷  
 た嘸しちやア有りしませんさうかと云つて此方から嘸われれば溜  
 つた食料が取れまいしとふしたら能いだらうと一人思案の胸を  
 焦して居ると同居の米國人はろこ々々支度をして何處へか出立  
 をする鹽梅ですからおすへは驚きまして 末鳥渡貸方や何處か  
 へお出なのですか……ト片言でも永く横濱に居るだけに英商も

ミルラ | 事 件

出 來 升 か ら 間 掛 る と 水 夫 先 生 は 泰 然 と し て 水 夫 私 し い つ 迄 も 斯  
う し て 居 ら れ ま せ ン 今 度 北 海 道 へ 往 く 臘 虎 を 取 る 船 が 有 升 か ら  
夫 へ 乗 て 往 つ て 儲 け て 來 る 心 算 で す 末 夫 は 賊 に 結 構 で す け れ  
共 私 の 處 に 滯 滞 居 る 飲 食 の 糧 錢 は 必 ず 有 り ます 水 夫 は 私  
が 北 海 道 で 稼 い で 返 す 心 得 で …… 末 夫 じ や ア 稼 け ち け れ ば 返  
さ 無 とい ふ の で す か 水 夫 ア 爾 々 有 り ます 末 元 戲 を 云 つ て は い け  
ま せ ン 曰 勘 定 を し て 見 る と 彼 是 百 圓 餘 も 有 升 曰 夫 を 一 文 も 入 れ  
無 で 剩 さ へ 何 共 い わ す に 立 う な ん て へ の は 歴 が 剛 過 る と だ ん だ ん  
ふ 外 は 無 何 處 を 押 せ ば ろ ん な 音 が 出 る ん だ ろ う 子 遠 國 の 人 は  
談 話 が 出 來 ん と は 此 事 だ 不 實 極 ま る 人 だ 水 何 と 云 れ て も 仕  
方 が 有 ま せ ン 無 袖 は 振 ら れ ま せ ン 必 ず 下 さ ぬ …… ト 途  
方 も 無 亂 法 な 一 言 食 付 て 遣 たい と は 思 ふ け れ ば 無 暗 事 を し て  
貸 金 の 損 だ 日 には 夫 こ そ 元 も 子 も 無 ち つ て 仕 舞 ぶ 道 理

ミルラ | 事 件

だ か ら 我 慢 を し て 居 る 内 に 彼 の 水 夫 は お 構 ひ な し とい ふ 顔 で の  
ろ 々 々 出 て 往 き 升 か ら 止 り 打 擲 ら れ て も し て は 愚 々 々 出 て  
行 つ た 處 で 船 が 今 直 に 出 帆 を す る 理 由 で も 有 舞 其 内 に 島 藤 繁 太  
郎 さ ん が 石 倉 さ ん に て も 談 話 を し て 船 へ 行 つ て 取 つ て 貰 ぶ よ り  
仕 方 が 有 舞 と 觀 念 し て 出 て 行 く の を 止 め せ ぬ 處 へ 表 々  
「ア ー ！ ト 抄 換 を し て 運 入 て 來 ま し た の が 今 回 の 被 告 人 ロ バ ー ト  
ミ ル ラ ー で 御 座 い 升 此 男 は 亞 米 利 加 の ニ ュ ー ヨ ー ク 洲 の パ ッ フ ア  
ロ とい ふ 處 の 出 生 だ 日 本 へ 來 て か ら の 事 情 は 段 々 お 談 話 を 仕  
升 け れ ば 此 家 へ も 度 々 と 云 ぶ の で は 有 ま せ ン が 二 三 度 來 て お 末  
に 冗 戲 位 は 云 つ た 事 も 有 り ます 知 り 合 つ て 居 升 の 所 へ  
の 顔 を 見 る と 心 配 顔 を し て 居 る の を 見 て …… ト ぞ う し ま し た 姉  
さ ん 身 體 で も 悪 い ン だ 顔 の 色 が 能 く 無 胃 だ け だ ぬ だ ぬ だ ぬ だ ぬ  
へ ス テ リ ー で も 興 し て …… 末 夫 ヤ ミ ル ラ ー さ ん お 出 な さい

ミ ル ラ | 事 件

し心配が有んで御挨拶もしないでとふも相済ませませんでした  
ろんな事私には擧げは無けれ共那嬢大變に顔色が悪いらん命に心  
配すると毒ですとん事たか私に相談して見て下さい何ですト  
深切らしく言れるのでお末も實は誰を頼もうかと思つて居る時  
ではあるし外國人同士誠に同じ米利堅の人たけに嘲しをしても  
宜らうかと思ひましたしミルラーも四十九と云ふ勘考の盛りと  
云ふ年齢ですからモシ旨く行くかも知れない無駄にして嘶しを  
仕て見やういけなかつた處で元々たと思ひましたからお末は  
やく口を開きまして末何に外の事じやア無ですか二階に居た  
米國の水夫さん御存しでしやう那奴が散々腹食倒して置アがつ  
て今し方靴だの靴下あんの古いのを一包にしてオア鹿船へ  
乗つて錢儲けをすると私の内の食雜用の事などは少しも云す  
稼けたら返すと斯ふ云つて止る袖を振切つて行つたのサ余り腹

ミ ル ラ | 事 件

が立からとふしたら能かろうと勘考て居る最中サ  
酷い事するソナ嘶しは米國では流行させん末日本たつて流  
行は仕ませんやネこんな事か流行つ子では下宿屋は廢業ですは  
.....  
のにらんあとをする奴か有ては國の恥辱です取つて上げ升  
アモ乗て行く船か知れ升か  
北海道へ来る船と聞合せると水夫仲間直くに知れ升と引受け  
て呉ましたからおすへは大喜ひで何分共にどの捨言葉に送られ  
てミルラーは海岸へ來て聞と分明ましたから端船を雇つて出て  
行うといふ船へ乗込まして談判をしました處か先方も女とは違  
ひますし殊にミルラーも名代の破落戸で随分過劇な事を遣る  
ですからとふ嘶しを纏めましたか元より金は無のさすから甘  
許りの品物ズボン、コート、オートムペリ、の時計といつたやうを



物と一ト「風呂敷」に致して之を引摺き「サンキウ、グロートナイト」の投  
察を後へ残して歸つて來ましたのかミルラーの大働きのやうで  
す畢竟是かかすへを取もつ縁かいナと來るのです

第九席

信用といふ二字は金で買へません物です第一買ふのに六つ  
放れるは容易の無者で御座い升たから西洋人は此信用といふ言  
葉を大切に掛升が日本人は眼の前の慾に迷ふ爲に信用を了取  
すのが幾位も有やうて御座い升おすへはミルラーを頼んては違  
つたやうな物の其結果かどふで有かと内實心配をして居升ると  
按ずるより産が易いとは此事か風呂敷包を肩にして「おすへ  
さん手を貸して下さる中々重たい……」末「チャマア大變な大き  
な包をどふしたの」ミ「是が百廿圓の抵當たもの」末「うんなに地

つて來たら儲かるたろう「夫がそふで無のさロンドンの柳原  
て仕舞物を買つたと云ふやうな見得サ……」ト脊負ふて來たる風  
呂敷を下ろすとナル程新網から以つて來た執達吏かど疑われた  
り「末「チャマア是が百廿圓に成のですかへ」ミ「成りませんけれど百  
貫の抵當に編笠一蓋だ取らない昔しと断念て下さい……」ト云わ  
れた時には驚いたやうな物の元來取れないと思ふて居たのたか  
ら取れた丈が徳とでもいふより他は有ません直に捨賣にした處  
で夫でも二十圓計りに成りましたのは座も積ればといふ假令に  
洩れずです「末「ミルラーさん賣て仕舞てからそんな事を云つて  
も遅いけれど歸つて來てアノ人が愚圖々々云は仕舞かサ」ミ「何  
を誰が云ふものか私が引受升」末「夫は「ア有難う是は失禮です  
が御禮といふ程では有ませんが氣は心どかい」升から……」ト一  
圓札を五枚並べましたが見向きもやらず「お末さん夫はいけ

ません何も私か體を取度との金が欲ほしののといふ譯わけで取とて來きて上う  
 たのては有ありませぬ氣きの毒どくだと思おもふからです……ト何處迄往いつて  
 も深こ切き一方ひの言葉ことばですから末すえは大おほに喜よろこびまして 末すえナル程ほど亞  
 米利加は一番後あとで開ひらけた國くにだけに信しん義ぎが堅かい國くにには世界せかい中の皆みな  
 の六分一むねは有あるといふが唯ただの水夫みづうでも金かねを金かねとも思おもわ無なと見みへる  
 ア、有あり難がたい……ト女おんなといふ物は太おほ層そうに大おほ事じを取とり思おもへば又またう  
 かりと乘のりる處ところが有あるは淺あ慮りいといふので有ありしやう其そのが爲ために  
 ルラーと能あたり中ちゆうに成なたのだらうと思おもわれ升のぼ亞米利加でも居すま膳ぜん食じぬ  
 は男おとこの恥はたといふやうな學問がくもんが有あるのでしやうサア、ミルラーも日  
 本人にほんじんに深こ切きをされたと思おもふと嫌きらしいから猶なほ更さらに實情じつじやうを盡つして見  
 せ升のぼ又また其その時は脱船だつせんの當あた時ときで幾いく何なにのお金かねも持もつて居すまたのですからか  
 末すえの懷中くわいちゆうも余あまり善よく無なのを知しつて居すまるから ミル末すえさん今朝けさ來き  
 た人が大おほう怒おこつて往いきましたのは何なにてす 末すえあれば此間こゝ少すくし

工面こうめんが悪わるかつた時ときに金かねを借かりましたのです夫おとこを返かへさぬといつ  
 て怒おこつたのです ミル私わたし茲こゝに金かねが有あり升のぼから出來きる迄まで借かつて上げまし  
 やう ミル那方あのうもなればを困こまりてしやう ミル私は別段べつだん困こま入りませ  
 ん夫おとこに金かねの還入かへい處ところが出來きて居すまるのです すても船ふねへは歸かへらぬと  
 云いつたしやア有ありませぬか ミル船ふねへは往いきませぬ船ふねの乘のりて居すまたト  
 一いちマス、セツマア號がうの船長せんぢやうは恐おそる恐おそい人ひとて水夫みづうが遣つかり損こしをす  
 ると不具ふぐにする迄まで打うたり擲ないたりするのてす私わたしはそんな事ことを知  
 ら無なくて神かみ戸こから此横濱こゝ迄まで參まゐる間ま雇かわれましたのてすすければ其  
 怖おそい人の側そばに居すまるよりも何か横濱こゝで稼かせごうと思おもつて居すまるを米利  
 堅人けんじんでクークと云いふ私わたしの知し己おのれの人ひとに此間海岸こゝ通とほりて送おくつて何か  
 職業しごくは有あり難がたかもう生涯しやうがい歸國きこく心算しんざんも無ないだから還入かへい切きでも能あたいか  
 らと頼たのむと夫おとこじや造船處ぞうせんじよへ入いれて還かへらうと云いつて呉くましたから  
 マア食たべるだけに不都合ふごうは無ないのです 至いた今迄何處こゝへ泊とどつて居すまたの

ですへ ミル百卅六番のビームス、カアチスの處に居たり其の九十  
 七番パーナート、ケーンの處へ泊つて居るのですけれど同じ横濱  
 に居ても日本人の店は安價つて結構ですが外國人の家は錦酒屋  
 でも旅合でも法外高價なので誠に驚き升すそんなら寝るだけ  
 は私共の店へ來て居ても能う御座い升ヨ 晝間は御客も有升し差  
 闕へも無じやア有ませんけれ共夜は十二時から誰も居ませんか  
 ら決して構ひはしませんヨ ミルハイ有難う私もろう成れば嬉し  
 いのですお末さん何にしる此の内に那方一人ではお客もいけま  
 せん誰か外に女を置いてはとふです其位な金は私がまだ持つて居  
 升ヨ 末「私も誰か置度と思つて居るですが此節は人が御座で仕  
 方が無のです夫に警察が八釜しい物てすから札附の女は置けま  
 せんしろれかと云つて御客を取つた事の無のでは往けませんか  
 ら是ても中々面倒あんてすヨ ミル夫はそうてしやうたが異人を

合人に秘き度といふのが探したら有ましやう十五弗有升から上  
 げましやう 末「濟ませんが夫じやア借て置升ヨ ミル借るかい上  
 げる……ト總ての深切夫てはと借た金が身を殺す端緒しとはか  
 末も氣が付く舞と思ひ升四月の廿八九日の談話て有たのです婦  
 女を店へ置度とは思ひ升が帯には短かし手襟には長してとふも  
 氣に入つたのが有ません五月の九日の晩十一時比てす 秋「姉さ  
 ん今晚は……ト道入て來ましたのが茶焙場へ出る清人亞温と云  
 ふ者の妾て鈴木お秋廿三といふ者てす此お秋といふ女は愛知縣  
 海東郡川口村字西川ある百姓鈴木林助の娘てす 末「おや秋ちや  
 ん珍らしい事とふして此様に遅く何處へ往つた歸りあのですへ  
 秋「少し事件が出來たのサ す「事件とは…… 秋「ナニ今日根岸  
 の競馬を見に行度と云つて亞温さんに頼んたら行つて來るが能  
 と許しが出たのだから私が早くから行つたのさスルト先の親提

に逢つたのサ すとの指指…… 秋野毛に居た時世話に成つて  
 居た藤さんにサ す「マヤ珍ら敷子 秋久し振たといふのでマヤ  
 一杯といわれたから私たつて萬更ても無から石川口へ往て天鼓  
 羅屋で御馳走に成つて九時半比に家へ歸つて見ると亞温の奴が  
 眞つ赤になつて憤つて居るのサ す「ナゼ 秋「ア私しも墨附が  
 悪いからとふしたのト聞と夜迄根岸の競馬が有かど突然に怒鳴  
 からイ、エ仕舞に成つてからお朋友が一緒たもんです「から天鼓  
 羅屋で御飯を食べて來たので遅くなつたんです「どうも済ません  
 とお末姉さんの前だけれと少しは此方も歴流たから下から出る  
 と亞温の奴め向に成て千連は女か男か夫を云へてんたろ私も  
 困つたと云ふのは連の名を云へは其先迄夜が夜中ても聞に往く  
 のたろアノ人がさたから迂潤な人の名はいへず誰に仕様かど  
 勘考へて居る内に返事の無のは大方情夫と一緒に巳の腹でもし

て笑ひながら酒でも飲んで居たのたろうといつて傍に在つた煙  
 盆で頭部を毆たから私しは承知を仕ないのサネエ子供の時から  
 たつて親父にも一ツ打れた事の無天窓を南京坊主に毆られたん  
 た物を夫から金切腰をあけて私も負無氣に成つて吐鳴て遣つた  
 のサ馬鹿にするサ手前の妾に成時に外の男とは嘶しもしません  
 お酒も飲には往きませんとは證文に出ては無や人の嫌がる南京  
 人の機嫌を取つて居て遣るのを有難度とも思やアからねへて少  
 し計り歸か遅いと云つたつて毎晩の事とねへ二年も世話に成  
 つていつてたつた一度た夫を愚圖たぐいふのなら出て往くから  
 跡で泣など斯ふ云つてネ す「マア一服お上り煙を

第 十 席

吸んで呉る茶に咽喉を濡しなから 秋姉さん聞て下さいよアノ

六十二

奴かマア斯ふ云ふ惜い事を云ふんたヨ鳥渡先月の初旬に子帯を一本買ひ度からといふと帯は二條も有から澤山しやア無かといふから夫は腹合せの計りだから丸帯か一木欲いのたど願ひと腹合せて悪ければ春中合せか能いと咄しやかるのヨ吉原の松飾りを帯にてもしやア仕舞し癢に障つたけれど飛出した處で往く先はなしと断念して居たけれど今日と云ふ今日にはもう勘忍袋の結か切れたから前後も夢中て出て来て桂庵へ先刻方往つて奉公の口か有あらといふと内の嘶しか出たからお末姉さんの處なら自分て往つて置いて貰ふ桂庵貸たけも餘計たと思つたから參たのですか置いて下さる氣は有ませんか……ヲヤ自分のい、度事斗り云つて茲に御客様の居るにも氣が付無ので那方御免下さいヨ……とミルラに合移したりミルラも遣入て来てから卅分斗りの立續けの長喋舌は實に言語は通じませんけれど唯何事か出来たら

しく思われて茫然として見て居る内に合移をされたからハア、談話の切れ際だナ位ひの事は分明ましたろう ヽ「おすへさん此人の談話は何の騒動ですへ……」ト英語で聞のですから秋には分りませんお末もまた英語です「此人は旦那と喧嘩をして出て来て置いて呉るといつて居るのです」ト夫は結構では有ませんか此人を店へ置たらお客も来るでしやう「夫でも先方の旦那から理屈を云つて来られた時には女一人で困り升から……」ト夫は宜敷私が引受升とんぢ人が来ても……す「秋ちやん此異人さんがいふには斯を引受けて遣るから店に居たら能かろうといふたかどふたる 秋「何も云つて来る氣遣ひもあしよしや来た處で私か断わつて遣るからいいは置いて頂戴ヨ……」ト相談が成立まして店に居る事に成と恐る敷ものてす女の引力といふ物は御客様も殖へて来て店も段々繁昌をして来ましたからお末も心の内に

喜ひまして す「アノ異人も中々深刻な人た有難いアノ人の爲に  
 こうやつて店も客か来るやうに成つて来て……ト喜んで居る所  
 へミルラーは一日早出に何れへか出行しか午後三時頃には廿才許  
 の外國人を引連れて歸り來つて ミ姉さんお客を連れて來まし  
 たお末さん……ト云ふ聲に出て見ると身形も可成な人物で指輪  
 て人の目を眩ます外見の虚色は米國人の持前と見へまして言葉  
 も沈着て舉動も高尚に見へるが少し酔つて居る鹽梅です 末「ラ  
 ヤ入らつしやいお秋さんお茶をお上げあさいな 秋「アヤ克うこ  
 う……」 ミ此人は亞米利加のウルワニア州ワシントン郡のアビ  
 ントンといふ都の人で醫者様の息子でネルフン、ウオードといふ  
 人です中々の紳士ですから大切になさいますし 秋「姉さん何處の  
 人たつてワシントンのアキントンたつて柵から何か落したやう  
 な人だ事ね す「日本の言葉か分明と腹か立るよそんな事をい

いてないよミルラーさん此御仁は横濱に久しくお出なのですか  
 ミ「イ、へまた亞米利加から來た許りです 末「何處で心易くした  
 のです」 ミ「以前私が泊つて居た百三十四番館のバーナート、ケー  
 ンといふ人の處へも來ましたし九十七番館のジョン、シー、ハーロ  
 ットといふ銘酒屋の店でも逢ましたのです大層に糧足を遣ひ升  
 から此人に私の心易い日本人の銘酒屋が有其處へも遊びに來て  
 呉ぬか日本人たから誠に安價して呉るしガールも居るからと云  
 つて進めたのですさうすると女か居るなら行ふと云つて來たの  
 てすからお秋さんに其事を云いといけませんヨ……」 末「さう  
 夫は有難う……」ト三人寄れば文珠の知恵とか況して世渡る銘酒  
 屋ゆへ甘い言葉の受答へお秋にも耳打すればラット承知は元來  
 商賈如何ある示談が着きぬか此末更に知る者なし扱子ルン、ウ  
 オートは夫から外國の店へ遊びに來るかミルラーは足敷

も近からずして奇麗にしては歸るのは年齢の若くだけ外見も有  
んか是といふのもミルラーの深切からたどか末は冷情でも女だ  
け少しく欺された傾向に成りて來ました土曜日の遅久し振に  
て石倉香太郎は遊びに來たり今日は幸ひミルラーは居ず秋も  
客にて遠くへ出れば心置なく差向ひ小酒盛の私室に 末子エ  
石倉さん此頃は気分遠々しいヒヤア有ませんか 香せふも誠  
流ないけれど商館の方が頼りに聞がしいので出る事も出來ない  
のサ 末「そふでしやうよ男は奇麗だし錢廻りはいゝし夫に義太  
夫が旨いの死物關がしいのが當然だわ 香おすへ變な事をいふ  
なッソナ事を云ふのは中の好く成つた當座の事だモウ二人の中  
では馬鹿な事を云つて居る處じやねへ夫はさうと此間の百圓と  
いふ一件の方はどふ方が付たのだエ 末「サア迷つたら其事を第  
一に頼まうと思つて居たのだが終思つて居る愚痴が先へ出て濟

ませんでした手勘忍して頂戴ナ………サアノ一件は石倉さんが特  
を捺すなら待つて遣らうと云つて呉たのサ 香「夫ヒヤア此度の  
土曜日に捺て方付て仕舞と仕様ふと店の方も大分客の足が付い  
たらうだナ蔭ながら喜んで居るヨ 末ハア有難うマア漸やく  
し計りサなに秋ちやんが稼いで呉るから能のサ 香「夫はマア能  
物を置當たのだ 末「けれど夫が困る事に少し身体の工が悪い  
のサ何外の病氣ヒヤア無のサ矢張お八重さんサ 香「何れへ病氣  
にお八重さんといふのが有のかエ 末「微毒といふのサだから長  
く働けさうも無といつて當人も心配をして居るのだヨ 香「夫は  
閉口だの併し顔へは出て居ないのサ 末「アまた夫君でも無のだ  
けれどマアお近い内だるうといふつて居るは 香「客と違つて微  
毒のお近い内は恐れ入た夫ヒヤア元町へ用が有から渡邊の前を  
通ふた時にお六さんに又何か有たら連れて來て呉ると依頼で仕

て運ろうか……末「儼り様ですがどふか 香切口上は略仕りま  
 してだナ 末「だつて夫じや口が利れ無わアノ夫からまだ香さん  
 相談が有のヨ外の事じやア有ませんが此七月の十七日とかに成  
 ると内地雜居とかに成つて亞弗利加人が居留地の外へ世帯を持  
 つて荒物屋をしたり佛蘭西の人が尾上町通りで旅舎を初めても  
 掃わさくあるのだといふけれど賦實ですか 香「夫は實地さう成  
 るのサ内地開放と云つて何處へでも住度處へ住でも能やうに成  
 のサけれどさう成つたからといつてさう外國人が一時に戦争の  
 やうに押して来る氣遣いは無からうかと思ふヨ 末「ナゼ 香「前  
 にしてからが本國で充分商買に成つて来る者を捨て土地も人氣  
 も知れない遠い日本へ出て来て費本を下して骨を折りに出て來  
 る者は無ろうしと思ふのだ 末「私はまた有だるうと思ふはナゼ  
 あれば日本は第一景色の能處だといふのと氣候の能といふのは

世界中の評判だといふし夫には本國で雇うよりも職人は安い  
 糊口にはらう掛ら無しするから大變に人が来るかと思ふワ 香  
 夫は誰しもいふけれど日本の法律が嚴重だといふのは是又世界  
 一般の評判だから今迄のやうに治外法權といふ物が有バ知らず  
 財産や性命を託すのは危険といふ第一勸考が有といふ噂をし  
 てをると 末「でも今迄より幾位か殖へるだるうサ 香「夫は減る  
 氣遣ひは無ろうサ 末「夫に付て相談が有んだヨ 香「何だへ 末「  
 マアか燭のいゝ處を一杯お遣りな飲ながら聞て下さいヨ……ト  
 猪口を指したり

第十一席

末「子エ石倉さん斯うやつて軒を並べて居る銘酒屋が皆も最初は  
 ポーイだとかコツクだとか云つて有た人が仕上げて女の二人や



三人使つて僅少の内に身上に拵へるんだ子尤も外國人の賣るのは酒のコツア賣は相場が有から高くも無が随分食る何と来る。高い事をいつて取るらしいサ人の事をいつては濟無ければ夫は度々有のではなしサとふして工面が克く成るだらうかと思ふと散銭が出無のたヨ外の家でわサ私の處なんすはとふしても月に二圓や三圓は目にも立無物が出るのだがらサ 香「ナンア 末「夫は車屋の悪い奴だの三下の破落戸が来て錢を貸して呉るといふのサ夫を遣らなければいつ迄も居やアがつてお客の邪魔をしたり女一人だと思ふと赫かして大きき辭なんぞ出しやアがるのだヨ 香「ソナ事有たらば裏口から巡査でも呼に遣つて連れて往かせたらいゝじやアねへか 末「夫が素人勘考サなぜならば營業妨害だと連れて往かれた處で四五日位の拘引だから出て來ると又直に來て先よりも手強く錢を貸せとふいわキ 香「さうした

ら又巡査に懸んで又遣つて貰つて…… 末「そふは往きませんやサ何にしる此方が弱い商買を做て居るのですから誠に男切でもあれは又ろんな事も出來まじやうけれど何といつてもお秋と私切ですから表向は 香「さうサ裏向を調べたら幾人も有が無は云れ舞からサ 末「また忌味が初まつた子ろんな事を云ふから醋酒屋を止させて下さるヨ何をしても構いませんから…… 香「とふも恐れ入ましたさう御仰られては一言も御座いません口から高野で飛でもない事をいゝました閉口致した 末「夫では相談が出ませんヨ 香「ハハハ冗談を抜に致して御相談に係りませしやう…… 夫だからとふしやうといふのです 末「散銭の出ないやうにするのにはとふしても外國人の名前に仕度と思ふのですよさうすれば早い嘶しが手落有ても私やか前さんの名も出ないし能事の有た時は名前を借りて居るのだと言れるし悪い事の有た時に

はアノ外國人が分ら無から仕方が無と迷が張れると思ふのサ  
 香中々能い了簡だけれソノ間拔な處へ名を借すやうな外國  
 人は先づ此横濱にてはなかるうと思ふせ夫共目當でも有のかへ  
 末「強盗を捕縛てから繩をよるといふやうな事は失禮ながら致し  
 ません目當が有からお前さんに相談もするのサ 香夫は其人の  
 心次第ヲ誰だへ一體うんな事を依頼ふと思ふ人といふのは……  
 末「アノ日外二階に亞米堅國人の遊滞りを取つて呉れたロバート  
 ミルラといふ亞米利加人サ 香「ア、アノ男か爾うか……ト石  
 倉香太郎が生返事をしたのはミルラは餘り評判の克く無男だ  
 位な事は自分も英一番のボーイを仕て居るのですから知つては  
 居るのですけれ共お末が充分乘氣に成つて居るらしい處を夫は  
 止たら能う不評判の男だから」とい、升と何だか嫉妬心から邪  
 事でも爲るやうに思はれるも残念、終にいふ近敷中にも禮儀あり

ですから「ア、間違が出来たら又何とか成るだらう」ト男の心の  
 い處が却て害に成つたやうな物てす今と成つて見升と 香「……  
 い、サ如才も有舞けれと克くアノ人の性質も見て知らにしま  
 と馬鹿を見る事が有た日には理合せが付か無 末「夫は私だつ  
 て心得て居るのサ是だけの家の物に名は借にしても渡すのです  
 から充分に研究をしてからであければ依頼はしません 香「ハ  
 ア、研究とは八かま敷出たナ夫に違ひは無 末「今迄の所は  
 ア、深切にして呉んですヨ 香「夫は結構です道り損なは無やうに  
 なさぬ……ト石倉も承知をしてくれましたから末も大きに容  
 びましてミルラに向つて 末「エエミルラさん烏渡相談が有  
 のヨナ、面倒な事は無のぞす茲の家の事……ト是から前に  
 申上下一條を咄して名前入に成つて呉ると依頼升るとミルラ  
 は大喜びですなせなればセツタア腕は脱けて来たのですし今の

處で別段に斯ふといふ商買はなし錢は無くなつて奈升し進退谷  
 まつて居る所ですから...私で能ければいつ迄でも御遣ひさ  
 め心配は有ませんから...ト舌たるき引受けて呉ましたから夫  
 では何分願ひ升ト示談が整ひましたが五月の下旬の事で有のは  
 裁判所の證明に依つて分明て居るやうです併しミルラーも別に  
 變つた事も無やうですが名前人と云ふ事に嘶しが極つてから酒  
 の吸場へ這入ては常人の好まウスキエーを勝手に飲では生醉人  
 に成つて居る様子なのです名前人に仕様と云ふ示談は仕ても生  
 醉人に成つて呉るとはいわ無くてす賦に鈴木お秋と云ふも中が  
 悪いのかお末に氣に入りません内にミルラーの所業か追々に能  
 く無處か知れて來たのでア、困つ 事が出來た飛ても無人に名  
 義を依頼したわエト内々お末も心配か出來て來ました

第 十 二 席

十九や廿才て又の鏡に成のは佛法ていふ前世の宿業とか過去の  
 因縁とかいふので御座いましやうチルソソウオト云ふ人物も  
 ころされたか矢張能い人と云ふのは有ません随分の物です  
 亞米利加から來ましてから元居留地フィシヤアと云ふ者の處へ  
 泊りまして大層に奢り宿泊料の如きも一週間廿圓位迄を拂ひま  
 して金を能く遣ひ散らすのでフィシヤアも是は結構なお客様た  
 ど喜んで待遇を丁寧にして居升内に金が少しく無くなりましたか  
 らと云ふるかと思ふと手紙を持つて來て 之は私か亞米利加  
 の父の處へ金の無心をいふて遣つたら返事か來たのですけれ共  
 父か書たので無のて私には讀むにから讀んで呉ると云つて出さ  
 れましたからフィシヤアは何の心も付せんで披いて見ると七  
 八日の内に金圓は遣つて遣ひすから何か相當の商賣も有ならし

る三千や五千弗ならいつても遣るといふ手紙です唯てさへ借用  
 をして居るフィンヤアですから猶更に大切に於て金の事は少し  
 も云わす。御入用なら少し位は金を立替升からといふやうな  
 工合でした是か皆を嘘言たから酷いのです亞米利加から来たど  
 云ふ手紙は酷く印紙を貰つて消印を偽造て見せたのですフィン  
 ヤアは夫共知らず少し宛ても大きな物です結局千貳百弗もウ  
 オードの爲にフィンヤアは詐欺をされたのですミルラーかナル  
 ソンと心易く成りましたのは九十七番館のクロンダイクと云ふ  
 酪酒屋へ往きました時に豫て自分か泊つて居た事の有たハイナ  
 ード、ケーンといふ是も酪酒屋の主人て是と一緒に来て居たのか  
 ウオードですお互に米國人の事ですから馴染も早く大分金を遣  
 うやうな扱梅てすから。私も近い頃に酪酒屋に成のですから  
 是非遊ひに来て下さる殊に日本の婦人澤山居升から面白う御座

い升……ト誘引たのか初まりて外國おすへの處へ来るやうに成  
 つたのです如何にしろウオートも余り人の能い方では有ません  
 のてす其内に鈴木お秋も馴染たのですか千貳百弗も詐欺をしや  
 うといふ位の男て有升から金遣ひもミルラーよりは烈敷のて云  
 ふ迄も有ませんけれ共酪酒屋の事ですから自然とウオートか参  
 升ると下へも置ないやうにちやはや致し升し丁度其場はミル  
 ーも尻尾を出し掛けたのたから誠に工合も悪むやうに成つて来  
 ましたのて猶更ミルラーには種々の刺撃を與へる事には是非成  
 のは當然てす去れば晝間は余り外岡の店にはミルラーは寄付ぬ  
 やうにして諸方を消遣付て居るのです一日百卅四番館のバーナ  
 ードケーンの處へ遊ひに来て例の通りウスキユーかビヤを飲ま  
 して四方山の雑居に成つてからの雑話を仕て居る處へ這入て来  
 ましたのかジョン、シー、バレットです。ハミルラーさん今日は

ミ「ハイ今日は能いお天気です。」「一杯奢りましやうか。」「夫は結構です。」「バケーンさん私か奢り升からミルラーさんの嗜好をお酒を上げて下さる。」「ケ随分出来て居るので夫しやア一杯どやにしましやう。」「ミ同し事ならウスキニーにして下さるなびやては酔心持か少あくつて往ません。」「ケ私は賣る身分てすから何方ても能いのてす夫しやアウスキニーを……ト出して呉ましたのを一息に飲まして。」「ミア、御馳走です有難い此勢ひて外岡の店へ往つて一ト寝入と道ろうかエ。」「ケ此間那處の店の前を通つたらウオートさんか居たか大層に女か取巻て居たかお金ても違ふと見へる尤も私の店へ來ても随分遣つた事は有か……。」「ミアレはあの男は往けません猫の子同様な奴て生して置奴しやア有ません。」「ケ此節は大分中か悪く成つたと見へるチ。」「ミナニ別段中の能悪いといふ理由も無ければ……トミルラーは頗る憤怒の有

様で罵言ました其内にバアレットも手持不沙汰といふやうな強梅て歸つて仕舞ましたからミルラーも外岡方へ歸つて來て見るとウオートか相變らす來て居てお秋とか末三人て何か込入た談話でもして居たど見へましてミルラーの姿を見ると談話を轉じて外の事に移つたらしく思われるのはウオートが折々ミルラーの顔を見ては腹の底の方で冷たい笑ひ方をして居るかのやうですけれ共斯うと云ふ聞た事も無のに怒る理由には往かす店の長ひ椅子へ寄り掛つて寝た振りをして居たのです其時には別段意を生ずるといふ場合にも立至りませんでした。」「ケ併し……といふ事は懐抱いたには違ひは有ませんお末もミルラーが歸つて來て一言も言葉を交へませんで寝た處を見たので是も怒つて居るな位の勘考も有たでしやうスルト鈴木お秋が頻りに身置がく成つて來まして店で御客の待遇も出けなく成つて來たので

秋姉さん濟ませんが誰か一人女を探して店へ入れて下さいなと  
 ふも四五日我慢はして見ただけですけれど骨の節が痛くつて  
 仕方が有ませんから 未困つたねエ尤も此間から身体が熱いと  
 云ふ事は承知はして居たけれどさう急に遣へ無やうな事は有  
 と思つてゐたのだが子夫じやアお前出た時の序手に元町の渡邊  
 へ寄つて何か女をよこして呉といふて依頼してお呉なければ何だ  
 日前に商賣をしたのでないと談話が更に分る舞から成るたけ一  
 度商賣をした者が能いと云つてお呉ヨ 秋ハア爾う云まじやう  
 ……ト桂庵の元町四丁目百七十六番地渡邊お六方へ依頼たけれ  
 ど六月中には女が拂底だど見へまして来ません其内に七月に還  
 入ましたミルラーは日々のやうに名前の書換の事を請求をする  
 のですからお末も自分から去だした物を今更断る事も出来す  
 るには何とか口實を設けなければ成ませんから思案をすると不

計思ひ當つた事の有ましたから幸ひにして 末ミルラーさん名  
 前書換の一件に付てネ面倒も事か出来たのですヨナトニ外の事  
 ては有ませんか此百卅三番へ来る時に金の工面か出来ぬの  
 て三月計り旦那にした人か有のてすヨ ミル少しも今迄るんな事  
 は聞ませんでしたしたナ 末さあかつたのです其人の處から手紙  
 か来たのですヨ来月は是非歸るからといつてサ ミルハア、其且  
 那と云ふのは何處かへ往つて居るのですか 末ハア亞米利加の  
 軍艦で一等兵曹を勤めて居るジョジョシ、ペンタリーと云ふ人なんて  
 すか四月中米西の戦争に付てヒリッピン群島のマニラといふ處  
 へ出帆をしたのです夫切手紙も有せんとし戦争の事はあつたし  
 實は死んだのたろうと覺悟をしてお前さんに囁ませんですけれ  
 共來月は歸つて来ると成つて見ると滅多な事を爲る理由にも往  
 かぬと思つて心配か出来たのナ ミル夫は構わ無しやア有ません

か ミナセ 振わ無のてす ミたつても 暫時の間 音信か有ません  
 から 名前を換ましたといつてもよし 夫ても 口實をいつたら其時  
 に 又取換てもいしやア有ませんか 又私の 名義にして 險呑たど  
 でも 思つて居るのならは 私から どんな書付ても 入れましやう  
 前さんの 云通りに 都合は 旦那か 歸つて 来て 見ても 不都合の 無  
 うにして 置たら 能いては 有ませんか……ト 頻りに 望む ミルラ  
 の 心の中は 知れません けれど 書付を 入れて 置といふ ならん  
 に 怖い事も 有舞かと思ひ 直しましたから 末らうてすねへさう  
 して 下さる なら 私も 心配か 有ません 併し 一應 相談も して 見まし  
 て……ト 夫から 末は 金も 借りて 居るし 萬事 深切に 談話も して  
 呉る 百四十九番館の 荒物商 穀水菓子屋の 齋藤 繁太郎の 處へ 来て  
 相談を するを 齋夫は 人の 事だから 善悪は いへぬ けれど 善く 向  
 ふの 人を 勘考て したらいゝ たらう……ト の 合搦て 有から 其上

て 直に 百五十六番館の 代書 兼 万辨舎の 澤口 勇吉の 處へ 来て 見升  
 と 改正 條約の 實施 間近といふ のてす から 支那人か 七八名 来て 何  
 か 願書の 相談を して 居るらしむ 處てす 末 今日 是 澤口さん 聞  
 かしう 澤ヲヤお末さんお上りなさい 何か 御用てすか 末少し  
 御相談 有て 来たのてすか 大さう 御客様か 御出の やうてすから  
 いつれ 又 近日に…… 澤 急きて 無れは……す 随分 急ぐのてす  
 けれ 共 澤 夫 ちら 窺ひ ましやう 此方の人 達のは 相談中 かのてす  
 から す 夫しやア 澤口さん 少し 顔を 借て 下さるな 澤 借升 けれ  
 と 歸して 下さるヨ……ト 冗戯を 云あから 勇吉は お末と 室へ 通  
 して 澤 借てすお末さん 末 ナニ 外の 事しやア 有ませんヨ 此間  
 も 御相談を しました 家の 名義人の 事てす 澤 ハア、先達は 途中  
 てすから 善く 伺ひ ませんて したか 何ふ するのてすか す 私 共の  
 店へ 遊びに 来る 亞米利加人の ロハート、ミルラ 四十九といふ人

に頼んだのですかどふてしやう 澤「どうてすか私には見無人たから善悪の判談は付られませんか 末「夫はそうてすけれ共其人のいふのは心配なら証文を入れやうといふのですか 澤「夫は善御座いましやう間違の無いといふ証を取つて置たらす「夫しやア濟ませんか其願書を認めて下さいましナ 澤「能いけれど石倉さんには相談をしたろす「ハア香さんも能いと云つたのです澤「夫なら二三日内に遣りましやう 末「成るならば今夜にも……澤「どうてすか夫しやア成丈早くす「どふか願ひ升……ト依頼をして歸りました後澤「口勇吉は其願書を認めまして取に来るかど待て居ましたけれど其日の夕方迄か末「来ません故自分には耶蘇の教堂へ往く序手にどふせか末の門を通り升「から持て往つて門口から 澤「か末さん先刻の依頼物たよ名前の處だけは間違と往け無から白紙に明け置たヨ其積りて……ト投込んで遣りまし

たから 末「どふも相濟ません、エ行ふと思ふと御客の絶間か無のてどふも有難う……ト請取たのか今日裁判所の證據物件は有力な物に成うとは誰も氣か付は致し升「まい

第十三席

七月十二日迄は別段記す事も有ませんてしたか十二日の朝早くからミルラーは來て居りまして名義人の談話を相變らすして居り升「へ 六「今日は……ト這入つて來ましたのか元町四丁目の雇人口入宿の渡邊か六てす一人の女を門口へ待せまして 末「か六さんお上りな此間から秋か身体が悪いと云つて居るのを遣つて居る心持の悪い事は何か代りには有ませんか子 六「夫て今日一人連れて來たのですかハア何てす以前から働いて居たのですから其處らは心配は有ませんヨ 末「夫は結構だ事何處の人 六「



東京の芝たとい、ましたけれど子供の時分から横濱へ来て居るのてすから姉さんが見たら知つて居るてしよ、向ふでは知つて居るやうな事も云つていまして、末、年は六、七、廿一だとかい、ましたのが突飛です、ヨ、當人の前では云へませんけれど……、末、い、共子顔を見せて下さい、六、鳥渡、何と云つたッけ、ネ、お上、んなさい、留、ハイ、御免なさる……、ト上つて来るのを見ると背は、低いけれど、スンナリとした外國人の嗜好、升、三、平、二、満と云ふ俗に、丸、ホ、チャ、です、瀬、戸、物、で出来て居る、ボ、ッ、ン、を見たやうな顔ですか、ら、末、能い子、だ、お、六、さん、サ、何、處、か、て、見、た、事、が、有、や、う、だ、お、前、さん、今、迄、何、處、に、居、た、の、留、屋、敷、で、姉、さん、御、目、に、掛、つ、た、事、が、有、ま、し、た、田、中、お、と、め、と、申、升、の、で、來、い、つ、か、ら、横、濱、へ、來、た、の、留、十、四、の、時、に、來、た、の、で、す、け、れ、と、横、濱、に、は、長、く、居、あ、い、の、で、す、實、は、香、港、か、ら、上、海、へ、往、う、と、思、つ、て、長、崎、迄、出、て、往、つ、た、の、で、す、け、れ、と、織、に、成

つたので歸つて来たのです、夫、夫、では長崎から歸つて来た計り、なので、す、カ、留、イ、エ、了、此、間、迄、神、戸、の、中、山、手、通、り、一、丁、目、百、二、十、番、地、の、酌、酒、屋、に、居、た、の、で、す、が、主、人、が、米、國、人、で、ヨ、ロ、ー、マ、ー、ヤ、と、云、ふ、人、で、國、が、違、ひ、升、の、で、總、て、話、談、が、面、白、く、有、ま、せ、ん、か、ら、實、は、飛、出、し、て、歸、つ、て、來、た、ん、で、す、け、れ、と、行、先、が、無、の、で、渡、邊、さ、ん、の、處、へ、行、つ、て、居、る、と、此、方、で、女、か、欲、る、の、の、事、で、す、か、ら、御、氣、に、は、入、升、舞、け、れ、と、遣、つ、て、見、て、頂、度、と、思、つ、て、來、た、の、で、す、が、末、れ、秋、さ、ん、此、人、が、來、て、善、た、が、ど、よ、だ、へ、秋、結、構、な、事、私、が、病、氣、で、さ、へ、無、れ、ば、能、い、の、だ、け、れ、と、少、し、身、体、が、悪、い、も、の、だ、か、ら、……、六、夫、じ、や、ア、御、目、見、で、す、か、ら、置、て、行、升、ヨ、左、様、お、ら、末、と、よ、も、御、苦、勞、様、留、御、目、様、……、末、ア、ノ、給、金、の、處、は、聞、て、お、出、か、へ、留、ろ、ん、な、事、は、と、よ、も、能、う、御、座、い、升、ヨ、當、に、も、し、や、ア、し、ま、せ、ん、か、ら、末、で、も、極、は、極、た、か、ら、月、給、で、二、圓、だ、よ、湯、錢、は、私、が、持、け、れ、と、髮、結、錢、は、お、前、の、方、で、出、す、の、だ、ヨ

留「おふでも……」と淡白とした女です。お末も尋んでミ  
 ラーに此事を告ると最初から氣に合ぬと見へました。何共い、ま  
 せん。お留はミルラーに會釋をした處で挨拶も克くしませんのは  
 何だか極りが悪かつたのです。此女は東京市芝區金杉濱町三番地  
 小山金八方同居田中勝次郎の妹で御座い。升是が當事件の見證人  
 で裁判所で尤も有力なる證言と認められる人なので。すお秋も此  
 田中お留が馴れたらば暇を貰つて病氣の治療をしやうと思ふ内  
 の出来事は氣の毒といふか運が悪いか極つた方のお留は泊りに  
 行つた計りに助かるとは妙事な成つて居る物です。女同士は直  
 に心易くも成るもので。秋お留さん勤めて下さい。此家の姉  
 んば人遣ひが上手で人を思つて呉て誠に克い人です。から。留私  
 のやうな者が氣に入升かしら。秋誰でも嫌だといつた事は有ま  
 せん。留アノ火鉢の脇に居る外國人は旦那さんですが御亭主

あの………とめいニエマア御客サ嫌な人さミルラーと云ふ米國婦  
 の水夫だといふのだお姉さんの借金を取つて来て遣つたてへの  
 を恩に掛て夫から能い中に成つてする々々べつたりサ私は喧嘩  
 をしてから口を利いた事も有りしあいつ。留私は旦那顔をして  
 居たから挨拶をしたのだけ共アノ人は氣味の悪い人だわ向ふ  
 では知る縁切れを私か神戸に居た時分にも中山手通りの店へも  
 来た事が有の。秋夫では先から知つて居るの。留名前は知ら  
 無ければ二三度見た事が有の。だといふ物は少し悪い事をして  
 有ので………秋ア何か悪事が………私もおふもさうだろうと思  
 ふのたければ姉さんが信用して居る物をさうもいわれずと思つ  
 て居たはのだ能い事を聞た。おせんな事だか咄してお聞せよ。  
 留滅多な事は云れないもの。秋夫はお留さん云ふ方が爲さのた  
 實は斯ふ云ふ話に成つて居るのだ。………ト名義人の一件を

孫持んでお留に嘔しましたから人の性は善なる者ですから 留  
 夫とやア嘔し升が内証で姉さんに御心得違といふやうき工合に  
 そう云つて上げて下さいナアノ異人さんは神戸に居た時に何と  
 か云ふ船に乗つて居る時に船長室から四百弗斗り盗んで逃上つ  
 た處を捕へられて禁錮とか云ふのを一年六ヶ月とか召上つたら  
 だどサ 秋ヲヤ大變さ嘔のいゝ人だ事銀行の筋を見つたやうに  
 金庫を食たの姉さんも夫を聞たら一考が起るだらう……トミル  
 ラ一の居ない時を幸ひに、末にか秋から告げましたから少し  
 氣に成り掛つて居る處へ前科の有悪人だと聞たのですから直に  
 澤口勇吉の處へ来て 末、誠に濟ませんければ此處の田舎の事は  
 少し待て居て下さる 澤、ナゼナ 末、ミルラト云ふ人は何だか  
 變りに氣味が悪く成つたからアノ人は止にして外の人にする積  
 りだから 澤、さふでもいゝけれど其ミルラとか云ふ牛乳の乳を見

たやうき異人が怒りは仕ないかニ 末、少し位怒られても仕方が  
 無わ 澤、夫はそうだけれど反古に成つたからさふでもいゝが先  
 の書附はさふしたエ 末、何處かへ遣つて仕舞ましたヨ 澤、見付  
 たら引裂て打捨つて仕舞つて下さるヨ話のと替て置う……ト約  
 束をして歸つたのですがミルラ一を睨むる事が出来無ので歸つ  
 て居るがミルラ一は少しも關係もしませんで盗問は何處へか往  
 つて飯を食つては夜に成と歸つて来ては外岡の店の長い椅子に  
 寄り掛つては寝て居るのですけれど末も二階へ上つて来ては  
 困るからと階子の上り口の處へ錠を卸しては寝るのです十四日  
 の午前三時頃にはさふしてか其錠を明けて二階へ上つて来てお留  
 を起して、ミルラお留さん此四五日盗のか内室さん大變に機織が  
 いお前さん頼むから話言して下さる 澤、ア、傍りした機織と思  
 つたらミルラ一さんかさふして錠を明けて来たの錠を姉さんが

持つて居る筈なのにサ……ト大きな聲にお末お秋も目を驚して末どふしたのお留さんヲヤミルラーさんはどふして二階へ来たの下りて下さいナ氣味の悪い人たヨ錠の有處を明けてサ秋亞米利加の人は油斷が出来ませんヨ魔法を遣ふから留説を仕度も姉さんがア、云ふ鹽梅では無益ですから下へお出ささいヨササアミルラーさん何と云つて居るのか留さん店に手を出すやうでは困るヨ冗談では無サアね下よ秋下へいらつしやいよ……ト三人の女が寝巻のまゝでよつてたかつて引下しました

第十四席

久し振りに石倉香太郎が遊びに来ましたからお末は待合で居たから二階へ連れて上りまして末島渡又相談が有のだヨ香已

の顔を見る毎度に相談が有と云ふのは困るナ何だヨ末外の事でも有ませんが名前人の一件サまだ確と極ら無のサ香いつ泣掛つて居るのだエ馬鹿氣た咄しだ末夫が深切だと思つたミルラーが不潔切味のサに色氣が有て懸張で夫に前科も有と云ふやうな工合なので私しは嫌に成つたのサ香だから私が言無事ではない當人へ嘸さない内に身分や心持を克く探つて夫からの事にしろと言つたじやア無か末夫が探り切あかつたのだから仕方が無や子お留が言つて居て子香今見たがお前に似て居る能い女だナ末お前さん能いなんて冗談では往け無ヨ随分惡物喰だから香ヲヤ飛た處へ談話が煎たナ夫から名前人の處はどふだへ末夫で私の考んではミルラーを斷つて店へ遊びに来るお秋の客で矢張米國人だがまだ年が夫程取つて居無から人も夫程悪くは無るうと思つて居るのでチルソソ、ウオートといふ人に

仕業かと思ふのサ 香夫は謙にしても同じ事だか先に断じた異  
 人が妙な心持にでも成るといけ無ぜ 末どふも仕方が無ワ異道  
 に手荒い事もしやア仕舞と思ふのだからけれどウオトする云  
 つては旨く無から先の旦那が歸つて来るから旦那に濟ない云  
 つて断るのサ 香夫は手付かずでいゝだろ成丈色氣を合んで  
 遣らぬいと酷い眼に逢ふぜ今日は鳥渡用が有ので野毛邊往くの  
 だから又歸りに来た時に善く相談をするよ仕様余り烈敷遣ん  
 さるなヨ 末夫は私だつて身上が大事だもの大丈夫だヨ……  
 太郎も何と無濟ま無やうな心持が致したと見へまして穩便に  
 云ふ事を繰り返していゝなから出て行きましたのが生選の別れ  
 成つたのです俗に云ふ虫が知らせるとかいふ事も有たのでし  
 うお末の壽命は一セコント毎に縮つて往くのは氣の毒です十五  
 日の朝はお齋日の事ですから二人の女も早くから身仕舞をして

居るのは近頃ヒリツピン群島から亞米利加の軍艦が三四隻も横  
 濱に来て居て中々近頃にない賑がてすから腕に掛て殺と云ふ心  
 組で居り升と九時頃朝の……三人連と二人組の水夫が来まして  
 酒を飲せる飯を喰せると大騒ぎを遣りまし……ミルラーも近隣同  
 様に今朝は早くから椅子に腰を掛けて来る人毎に世辭をいつて  
 居るのです三人連は飯を食仕舞つて初定は幾位だといふ段に成  
 るとお末が 末留ちやん五十錢で能いヨ……ト腰を掛けるよ傍  
 から ミルラー……トいわれましたので鳥渡お留も困つたのです  
 主人の云付通り五十錢取て置は不思議は無のてすがミルラーの  
 一弗といふから少しも余計に取つて主人に掛けさせやうかと  
 いふ勘考は有升から少し猶豫をして居るのを 末イ、ヨ五十錢  
 て……ト再度の命令的てすから仕方があく五十錢宛取つてお客  
 を歸したのですミルラーの一件は登成が無つて歸れたの

です。三「お留さんナセ一弗取ら無のですよふて持つて居ても遣ふ積りで上つて来る水兵の錢だ物を……」留「でも姉さんが五十錢で能いと云ふのですから一弗取らなかつたのです那方の云いふ事も一弗償し度も無ですけれど三「お末さんナセ私の云ふ通りに取り無のです。末「だつても取れませぬ物アソナ品を食へさせて一弗は三「よふせ一度切の客です後は亞米利加へ歸るのですもの。末「夫でもさうは往きませぬはアノ人達は船へ歸つて百卅三番で酷く高い物を食て来たといわれると其嘶しを聞く人が来て呉ませんから三「そんな事は無儲る時に取て置ければ……」末「夫は大變に意氣組は違ふはろんな積りで居て呉ては店が寂れる共繁昌は仕ませんわ。秋「姉さんミルラーさんの勘考は往けませんヨ。末「よふも有難迷惑といふの……」ろんな人が店に居てけ爲にあらあいかからミルラーさんは今日限り私の店へは遊び

に来て貰ひ度無ものだ。留「追出して仕舞方が能う御座い升わもし此人が名前前に成つて旦那面でもするならば私共は濟ませんが外へ往つて商買を仕升わ。秋「さうだ其能心持の處で稼いだ方が割事だわ。末「何にしる稼いで呉る女達が前さんを忌うのだからよふも仕方が無出て往つて下さるナ……」ト三人の女が交代の悪口ですからミルラーは能てゝる持がする理由が有ません三「宜敷出て往き升預けて置た刺刀を下さる私出て往き升。留「姉さん刺刀あんどを預かつて有のですか出してお上げなさいヨ。末「此な物がよふ成るか……」ト出して與へたまへお末は表へ出ましたのは面倒だと思ふからですお留は表を向て居る内にミルラーは酒場へ這入て勝手にウスキユを飲うとするのかお留が見ましたから飛て来て。留「ミルラーさん何をするのサ姉さんが許しも仕無物を飲では……」ト後から徳利を取りましたのでミル

ラーも心に据兼たど見へて　ミ生意氣な事……トお留の喉咽  
を締めましたから「アレー」トお留は大きな聲を出しましてからお  
末も歸つて来ればお秋も来て見るとミルラーはボクツトからナ  
イフを出して今にも突うとする工合ですから二人共大きな聲で  
早くお逃ヨナイフで突くヨ……ト云れましたから驚いてお留  
逃出しましたのはお留も甘一です是から何處かのワイフに成う  
と思つて居るのをナイフで突かれた日には假名で一字しか違ひ  
ませんが大變な違ひですナイフは突くものワイフは……

第十五席

(編者云島藤とあるは齋藤の誤りに付此に訂す)

ミルラーは其儘長椅子に宜り掛つて寝て仕舞たのですが十六日  
の正午過に成升と豫て馴染の高橋お竹といふのが旦那の外國人  
のフレリト、ゼー、ムス、カアチスといふのを連れて来て　竹「今日は

お末姉さんは　末「ヤお揃ひで何處へ　竹「今日は闇が敷處へ御  
氣の毒様ですが少し願ひ度事が有てナトニ他の事では無のです  
か此間の一件千四百四十九番とかに明家か有てへ晰しさ夫を借り  
て遊んで居ても詰ら無から矢張銘酒屋でもしたらと旦那か云つ  
て呉るから雑魚の大魚交りに初めやうかと思ふのだがとふでし  
う　末「百五十六番だヨ夫じやア往つて上やう　竹「那方少し待て  
居て下さるナお酒もビヤの外呑では往けませんヨ　フ「宜敷ビヤ  
一本下さる……トミルラーの寐て居る所を肴にして飲はじめま  
した二人は表へ出ると雨がぼつ々々降つて来たので大急ぎに百  
五十六番館なる澤口勇吉の處へ馳込まして　末「今日は　竹「済ま  
せん　澤「お上りなさる雨の爲に降込られかナ　末「イ、エ用が有  
て来たのですヨ　澤「何か御用　末「先私居た家が明て居るとい  
、升から夫を此か仁が借度といふのですから又何分共に願ひの

で 澤「さうですか結構です 末「夫から書て頂いた書付を待たせて  
 来ましたから御序手の時警察へ願つて下さりました 澤「明日は  
 幾位も序手が有升から置いてお出なさい 末「どふか願つて 澤「  
 前人が又違ひましたチジョロ、ヘンヘリとか書て有升へ 末「  
 アミルラーは止たのです 竹「ミルラーといふのは寐て居た人  
 すか 末「ハア 竹「でも断つたら何か仇をしやアしませんか 末「  
 何か爲るでしやうけれど仕方が有ません者雨が降つて来さい  
 へに歸りましやう澤口さんどふか願升 澤家の事も明後日あたり  
 迄に極て置いて上げ升から 竹「どふか何分……ト別れて百三十三  
 番館へ戻つて来ると雨の脚も立雷電の音も聞へるやうですから  
 暇を告げて二人は歸りました内に雷は強く成りまして尾上町へ  
 落雷升るといふやうな工合ですから折角の御齋日も何にも成ら  
 ません夜に成ても御客はなし退屈でも出歩行事もならずといふ

處へ午後七時半頃フレット、カアチスと高橋お竹が来て又家の談  
 話をして居る時にはミルラーも起上りましてフレットへ挨拶を  
 しましたからウスキューを一杯飲せて四方山の嘶しをして居る  
 處へジョンソンと云ふ英人も来り合せて嘶しに尾の尾の咲て来  
 ました内に九時に成りましたから「明日は早く用が有から歸る  
 う左様ならト酒の錢を拂つて二人は歸りました時にミルラーは  
 長椅子に寄りて他愛なく熟眠してありしなりお末も其儘出去り  
 たり内に十一時を報じたればお秋は心地悪しく逆先へ二階へ寐  
 に行たればお留もミルラーの傍に居眠りて有し時十二時に近か  
 らんとする時にお末は歸り來つて 末「鳥渡とお留さん百四十九  
 番館にお客が有から泊りにお出よ 留「アヤお歸りなさい 末「今  
 私が百四十九番から引受て來たのだから早くお出ヨ秋ちゃんは  
 どふして…… 留「必持が悪いといふ升から先へ寐て居升ヨ夫と



ヤア姉さん往つて来るわ 末「けれと明日は成丈早く歸つて来て  
 お呉よお秋が身体が悪いから 留「承知しました……ト出て行表  
 の戸を引立んとする處へ ウ「今晚は……ト遁入て来たのはキル  
 ソンウオートです 末「ヲヤ二三日見へませんでしたね ウ「少し  
 用が有た者ですからミルラーさん能く寐て居升キ 末「仕方が無  
 のですヨ今日も斷つて出て往つて呉るとい、ましたのですけれ  
 共往か無のですわ ウ「尤も往く處も無のです此人も困り者で警  
 察でも目を付て居るので種類々な名を改へてナヤレースと云つ  
 たりパシメローと名乗たり随分厄介な代者ですト寢て居ると思  
 へはころ二人しての悪口ですミルラーは始終の舉動を寢入し如  
 くには粧をへ共其實は眠られす誠ニウオートの談話の中に俺か偽  
 名して歩行る事杯をいわれし物から唯でさへ此者の來りてより  
 此家の愛想能からすして剩さへ店の謝れる原因になれば出て行

杯どの無禮の言葉は皆此奴より起因し事ならん今に見よやの  
 念は決して人の知る處ならず ウ「私今夜大變に酔つて居升濟  
 せんが此邊へ寢かして下さるナ 末「ア、能う御座い升共お秋が  
 今夜は身体がどふも美しく無ので早く寢ましたから失禮ですけれ  
 ど勘忍して頂戴ヨ ウ「よろしむ夫では茲へ寢かして……ト云ふ  
 内さへも引入れるやうな工合故にお末もミルラーの手前丁重過  
 るも能く無ことよろ々しく挨拶して二階へ上りて寢に就きし  
 は零時三十分といふ時分ならんか疾と様子を計り居たるミルラ  
 ーハ起上りて一息つき豫て目を付置たる茶籠筒の上の所有箱の  
 中よりして取出したる三角形の鏡氷を砕く爲に用ゆる西洋形の  
 鏡兼て持居し西洋形の剃刀を第一にウオートの寢息を伺ひた  
 つた一と打頭腦を目當に力任せはづんで打たる事なりければ何  
 そ溜らんアット一聲血は廻りて九尺も隔てし壁へ刻たる血染

の紅葉剃刀にて二タ所耳の下を突通し鼻を下から刺き上しは如何成心得の有ての事か剃刀は二ツに折れてければ其處に打捨二階の階子の上り口に卸してある西洋錠は豫て合鍵の拵へ有るかろうつと忍んで二階へ上りお末お秋を惨殺したるは一席二席に説たれば今更説くも重複なるべし

第十六席

人を殺すといふは唯だ其人の息の根を留めるを以て目的とあすべきに殺したる上にも又其死体に苛酷を加へて有るは人をして其當時をして追想せしめさば轉た戦慄恐怖の念を起さしむべし  
検事の論告を據ころとして斯くは物したりき扱も加害者なるミ  
ルラ一は三人を惨殺して其凶器は階子の下流し本杯へ隠し置て洗面鉢にて血染を洗ひ落し酒場へ道入て今は早止むる人も無物

から好めるウスキエーを續け飲にし百三十三番館を立出たるは午前六時といふ折ありし誰知るべき人も無き事ありと已は思ふなるべけれど天道何とて此大悪を見通すべきや天知る地知る人知る吾知る連自分の悪事は自分が一番跡で知るもで有るといふ事を知らぬ程淺間敷者は有ません三人を殺して手足を洗ひ罪を隠し覆たげの血染のシャツを脱で階子の下へ入置て外岡末の家を立出たるは午前六時三十分頃にて有し丁度表へ出るや否やばつたりと出逢ふたるはエス、ロー、バナ、ン二十七といふ者也是も一箇の破落戸同様にして始終横濱長崎神戸と所定りぬ浮葉鳥且は香港にありて火夫となり商船に乗るかと思へば夕部は室蘭の沖に隠虎蜜獾船のボーイと成杯何處に住といふ者でもなし併し最初は米國船のセキートル號の水夫にして米國ブルック、ア洲の産なりといへり六月八日にマニラ島え赴くべき米國の病院舟リソ

「フ號の火夫となりて十四日に横濱に來り夫より五六月の二月間はなすへき業の無まゝに百廿三番館の聖教の教師スメルサの方の寝歸りして救世軍の會堂へ出入してある内にミルラーと心易くなれり今しも何處よりの歸りかは知れされ共不斗通り掛りたればハ「ミルラー大さう早いお何處へ往くのた ミ「ヤアバナシかお主も早いな ハ「ホ、朝つから機嫌が能い處を見ると夕部も評判の女の處へ引け込んで居たと見へるナ顔を見ると余り女にどふ斯ふいわれるやうな柄往きでも無人見掛に寄らないものた ミ「大さう惡くいふな ハ「イ、エ舉ているのだ一杯奢つてもいいだろウ ミ「今茲では仕方が無百廿四番へ往つて衣服を着代へるのだから那處迄往けば一杯位ひは飲ませるのサハ「酒にさへなるとあらば何處へでも往き升共……トミルラーは痛く酔ふて折にふれては倒れ掛るを助けなから百卅四番館なる

「フームス、カアチスの處へ來ました時はカアチスは起た斗りの處です酒の置場の掃除を済して巻煙葉を煮しなから表を眺めて居る處へ ミ「グイトモイニシグサ……ト二人が這入て來たのですカ「フヤお早う能い顔が二人揃つた日には日本の銘酒屋は泣ねどふしたてんなに早く ミ「今途中で此男に逢つただけと別段何とも無のサ酒を一杯飲して下さるまし カ「今朝は大分に酔つて居るやうだから止たら能かるウ ミ「能い有升借りヒヤア有ませんヨ カ「錢の有無をいふのでは無足も浮雲無から夫よろけて居るヒヤアないか ミ「夫ヒヤ賣無といふのですかエ酒やへ來て酒を買ふといふのに賣ないといふのは不思議だ夫共俺達には往けねへといふのかエ愚圖々々いふと鐵砲でドカンと道つて仕舞ふせ カ「仕方が無いさう酔つて居てはお前の打鐵砲おから當つて打れてもいゝのだけれ共「ア酒を上げると仕様ウスキヤエーがい

のかエ……トコッブに二杯出したのをパナンは一息に飲は  
 しましたけれ共ミルラーは流石に一口も飲なかつたのは事實で  
 す。カ夫みさる飲ないでは無か。私はい、が此人にモウ一  
 杯遣つて……カ夫では其處に有のを。ハ私はホートワインの  
 方が宜敷ウスキニ一は強過升か。カ夫では是を元の垣へ明け  
 てホート酒に仕ましやうア、手敷の掛る事だハア、有難い能い  
 心持に成ましたミルラーさん御馳走に成て私は歸り升口。朝  
 の食事でも仕て往つたら能いだろう奢るから……ハ有難いけ  
 れと茲に持つて居る領事から貰つて来た手紙を持つて今日出帆  
 する軍艦へ乗る積りだから私は急ぐのサ。商業じやア仕方が  
 無夫あらば御勝手次第だ……ハナレハ別れて逃るやうに出て往  
 きましたが一杯奢られた酒は三四日の係合に成つて連累と迄人  
 に云われたのだから餘り嬉しくは有升舞。ミサア勘定を取つて

下さる是だけしか無から。カ二十錢でい、五錢多い是はいら無  
 からポケットへ入れ置なさい。ミ濟ませんが衣服を換へ升から  
 二階へ……カア、能共少し寐たらい、だろうそんな鹽梅で往  
 來へ出て又喧嘩でもすると厄介だから……ト注意をして還りま  
 したのも人を殺して来たとは夢にも知りは致しません僅少二時  
 間半ヨリ立加立あい處へ小松中嶋鮫嶋の三刑事は巡査三名を隨  
 へ米利堅の領事から巡査二名を借受けまして田中お留を見證人  
 として出張昨夜の外岡方の出来事をカアチスに告げミルラーの  
 宿處へ踏込ました之余の神速にミルラーも逃も引も成ません  
 から態と平然たる風体を粧ひまして拘引に相成ました日本にも  
 殺人事件も數多有加害者の知れて居るのも有升けれとこんな  
 早く拘引に成つたのは有ません最も假令にも拘引矢の如しとは  
 いい升けれ共……扱ミルラーを加賀町の警察署へ引て参りまし

て一夜の取調へを受けて其より根岸の監獄署へ移す事に相成まし  
た實に改正條約實施の手初に當りましての出来事で有升から内  
外人は共に眼を集めて判事の爲す様子へ注目して居り升から宮  
島豫審判事は一通りならぬ盡力にて暑中も厭わぬ取調へを急さ  
頻りに勉強を致し升る内に様々なる風説は立ものでミルラーは  
監倉の内で荒れて手に乗らぬとか判官に對して決闘を申込んだ  
喧嘩を仕掛けた杯といふ評判が立升全体判官から帥直へ吹掛る  
喧嘩をミルラーから判官へ遣つては少しく理屈が違ふやうです  
是は又筋が違ふかも知れません

第十七章

ミルラーが穩當ならぬとの噂を聞かして心配を爲た人が有升  
のは遠來町一丁目四番地に居るメソヂスト教會の教師山宮之

進といふ人です新教の教師ある居留地百一番館の米國人エフ、エ  
ル、ス、メ、ー、ル、リ、ーと相談してミルラーを戒戒せん爲め有馬典獄へ  
面會願ひを出したり典獄も別段外國人の事として丁寧の上にも丁  
寧の事にしてあれば直に承知すれば根岸に廻き二人してミル  
ラーに因果應報の説教をして罪を犯した者なれば其罪に伏して  
上天へ産れ代つた方がいゝだろさといふやうな事をいつたのだ  
らうと思われ升ミルラーも有疑く聽聞をして 三私も別段に知  
ら無事ですからとふも仕方が有ません一日も早く公判の開廷を  
して貰つて早く世の中へ出度と思つて居り升る今日又御二人の  
御厚志の段は有難く思ひ升殊に入獄以來有馬典獄の深切中山看  
守部長の取執、林、柴田二看守の丁寧は御二人よりも宜敷御禮を願  
ひ度御坐い升又とるか聖書一冊御差人を願度……ト更に俺が罪  
を犯せし様もなし七月廿一日の面會は齋餅に成つたやうな物で

ミルラ | 事 件

御坐い升大澤龍吉といふ人は強りに奔走を致してミルラー辯護  
人の事杯をいふて送りましたが本人は何處迄も無罪なれば居ら  
ぬとのみ云居たり自由黨員の辯護士信州の代議士なる立川雲平  
氏よりも無謝儀にて辯護の勞を取て遣らんと云送りたりしも此  
同様の言葉をも以て斷つたり併しながら豫審も追々進行して彌  
々終結間近に成つて公判開廷と云ふ運びに成つて來升と流石に  
ミルラーも心細く成つて來たと見へまして大澤氏の忠告に隨ひ  
まして私撰の辯護士を依頼する事に相成りました是と負擔して控  
訴の入費迄も持つて遣らうといふて下すつたのは元裁判所の判  
事を勤めて今日麻布に住んでお出に成升る辯護士秋山源造さん  
であり升只今一度の事件に不思議な事の有ましたのは同名異人  
が二組有たのも妙です高橋お幸の旦那に英國人でソレソトゼー  
ムスカアチスと申のが有まして百冊四番館には米國人でゼー

ミルラ | 事 件

スカアチスと云ふ人が有升又辯護士に秋山源造と云ふ先生が有  
を控訴院の書記に秋山源藏さんと名乗るお仁がお出に成升のも  
何かの縁とでも申ので御座いましてやう余事は置まして其辯護士  
秋山先生の紹介にて高橋庄之助牧野賤雄井上八重吉の四名が辯  
護に立て下さる事に極りまして彌々三十二年八月七日横濱地方  
裁判所第一號の公廷にてミルラーの公判を開く事を諸新聞に傳  
へられたり昨夜多細雨の降頃りて有しかど好奇心に獲れたる各  
自は早朝よりして裁判所の門前へ押寄せて門の明くべき時間を  
待居たり中にて目に立しは横濱商業學校なるウオーカアとハス  
ストーンの二氏及び外國人數名見參れば外におすへに關係の有  
さうな婦人四五名も見受けたり被告たるロバート、ミルラーハ  
午前八時根岸の監倉より船にて送られ裁判所の裏手なる物揚場  
より上陸して盛道を潜り判官の出廷を相待居れり内正に九時十

五分と成りまして開廷せられたり百七八十名の傍聴人は我勝に入込んど葬めき逢ふにぞ看守巡査は漸々に是を制して百廿名斗りを入られたり去れば空敷して歸る者五六十人に及びたるに氣の毒の事にて有し清寂ある白洲を見渡せば判裁長は佐藤博愛氏にして其右席に座したるは陪席判事ある設樂勇雄又老席に座したるは同し陪席なる森井良策氏檢事には堤定次郎氏あれば書記は佐藤得太郎氏なり其の柵の中に立たるは被告人ミルラーにして洋人の割合には脊も低く毛髪も黒く鼻の下に八の字を畫きしめき鬚を生し頭髮は二分剃り計りにして別段癡悪なるやうに思へず或新聞に松平紀義と比較られたるもナル程罪狀殘なるは松平に過たりといへど面の様子は紀義程には見られず去れば克き取組なるべしチルの上衣に線チルのシャツを着しカムレ糸にて編し襟錦をなして公衆へ對して怖るゝが如く恥るが如く始終

頭部を下げて扣へ居たりし辯護士は秋山、高橋、牧野、井上の四名其外に秋山氏の事務所にある英國の技師ラウダアを助手にする事を許可されて並べり通譯官としては前米國人にして當時東京の商館の書記を勤め居る歸化人小林米珂及び白石通譯兩人は豫審から遣つて居るので有升今一人通譯の助手として都合三人扣へて居り升佐藤裁判長は小林米珂を指さして起立をさせ年齢住所姓名商業を問ひ併してミルラーに關係あきを確めて確實に通譯すべき事を宣誓をさせ升

鳥渡お断りを申升が是からの公判は必要の所丈を掲げまして大概は省略するからとふか其お積りで公覽を願ひ升抜て居るのでは無抜たのですから

判被告の年齢国籍及び出生地現住所を申立イ ミ米國ツハハア  
ロ一洲グラーブランド町百卅二番地日本の住所は定からず重に

百卅二番館あるセームス、カフチスの處に居れり職業は水夫年は  
四十九才……ト答ふる檢事堤定次郎は立て公訴狀を讀上り則ち  
今迄記しました事故爰では申演しません小林さんが通譯を致して  
聞せ升のです兇行の事に及ぶ處に到り升ると頸骨の頰りに助り  
まして被告の舉動の穩當で有ませんのはとふも自然といふ物が  
付て廻るので仕方が無やうです

第十七席

扱貞吉がお詫を致すのは取急いで廻らぬ筆で書き升と故に裁判  
の處はとふも旨くは往きませんが成る可く短かに致し升から御  
勘辨を願升夫に御調べに成升る佐藤先生も多少お困りに成つた  
ろうと思ひ升のは通譯が一言を挟んで應答をするのですから既  
を隔て、痒さを搔くといふやうな工合だろうと思われ升本には

總て通譯の言葉は扱き升から左様御承知を願升 判父母は存在  
するが ミ有ません 判妻及び親戚は ミ皆有ません 判宗  
教は何を ミ羅馬の舊教 判教育は ミハイ僅に 判其低度は  
如何 ミ讀書をなし得るのみ 判日本へ來りしは ミ四月八月  
なり……ミルラーはお釋迦様の生れた日に來て地獄の蓋の蓋の  
明た日に惡事をしたのですから長へいゝ男 判船の名は ミ  
タムオー、シヤンムー號 判船中の仕事は ミ水夫 判其船の出  
帆の折に歸らざりしか ミ金を貰ひし故に歸らざりし 判股船  
せしには非ざるが ミ否 判米國の領事の處へ往きて船長の不  
平をいゝし事は無か ミ有たり船長は殘酷の人にて人を殺した  
る事も有ば 判船中にて罰を受し事はなきか ミ歐打されて右  
の腕を折れし事あり 判其船は何處を航路か ミ紐育より横濱  
夫から香港又紐育へ歸のです 判いつ乗しか ミ昨年十一月廿



二日に 判何處にて ミ紐育にて 判給料は幾位 ミ毎月米國  
 金貨にて廿八弗五十仙 判横濱にても貰ひしや ミ日本の金子  
 にて百 判横濱へ上陸の後は何れに居りしか ミ百卅二番館  
 外岡すへの隣家にて米國人なるフランク、トールの處に居たり  
 判外岡方へはいつ行しか ミ五月の三日でしやう 判其店には  
 主人の外にも若い女が幾人も居て外國の水夫杯と呼入ては待遇  
 をするか ミ左様でず 判チャンリース、ドルバアの居たるを知ら  
 ミ其人の居たるを知れり 判すへどの關係を知れるか ミ其娘  
 さんが世話をして居たり……小林が此世話といふ事をキープ則  
 ち情夫と通譯しました 判其人の勘定にて掛合し事が有か ミ  
 あり・判金高は ミ百廿圓程の勘定なれど持合せなく物品にて  
 廿圓程をとつたり 判手酷き談判をしたか ミ左様 判いつ頃  
 か ミ五月の末頃あらん 判其人の出發の後は被告と末への開

係はドルバア其人の如きか ミドルバア別段に……關係の無や  
 うあり 判先の申立は間違ひなりしか……ト茲で小林さん間違  
 か分明たのです情夫では無唯お話をしたのだといふ事が 判外  
 岡方にて金を遣ひしか ミ三日の間に六十弗を拂ひ其時に十弗  
 程借りに成たり 判飲食の代價の外に末へ金を與しか ミ五月  
 三日金貨十五弗遣りし 判夫より始終泊りしか ミイ、エ時々  
 判上陸の後職業を求めしか ミク、クといふ男が何かさせて遣  
 るといふた計りなり尤も同人の世話にて造船所に入り六七十圓  
 を取り仕事に成りて止たり 判其金は何に遣ひしか ミ  
 ウオナー、チーン方にて宿泊料一週間に八九圓を拂ふたり 判末  
 と特別の關係はいつ頃から成りしや ミ五月廿八日の晩ならん  
 ……ト誠云に云へるに云たり 判其後は ミ三晩續いて……  
 判六月から七月迄續いて泊りし事はさきや ミ三晩 判末方に

百二十  
 有時末や他の女が追出さうとした事はないか  
 ミ「格別の關係無ければいわず 判「不和なる者は無や ミ「唯一人に對してあり 判「其女の名は ミ「二日しか居ぬ故名前も知れず 判「争ひの結果腕力に訴へし事は無か ミ「腕力といふ程では亦くも女に嘘言を付れたれば其女の耳を引張しに其女は我顔を引挿いたり……ト此即田中お留の事ですミルヲ一の満身の憎し味はお留に有のですが凶行の當夜に泊りに往つたのは實に僥倖といふべきのです判「末が店の名前人に成つて吳よと断せし事はあるか ミ「六度計り 判「承知せざりしか ミ「いつ立去か知れざる故……判「未は他の外國人の名義に仕様とせしを知れりや ミ「ジョー・ヘンリーの名にせんといふたりヘンリーは外岡の家賃二月を拂ふたる人なれば 判「其人は今何處に居るか ミ「オタンピヤといふ船に乗りて紐育に在とか 判「家賃は出帆の後に送りしか

百二十一  
 ミ「否 判「如何にして知り居るか ミ「ヘンリーより聞たり……小味はじめ残らずさう聞たるも末から聞たりといふ誤りある事後に分つたり 判「七月十四日末は被告の名義にて營業したしこの願山を認んどせしを知るか ミ「夫に付て申上ん夫は末がジョー・ヘンリーより留守居に頼まれたと云ふ委任状やうな物を作り吳よと頼まれたり七月十四日の朝九時なりし 判「七月十六日は末方に有しか ミ「然り 判「引續て居たるか ミ「七月は五日及十一日に泊り十四日十五日十六日も泊れり 判「十六日に末方を立てれど請求されし事は無ししか ミ「決してなし 判「十六日の夜は何時頃に寝しか ミ「午後六時から九時迄の事は寝て居ても記憶し居るも其後の事は知らず 判「フレンチトーストとムスカアチスと知れるや ミ「十六日に達たり 判「何時頃にか ミ「午後三時外岡方へ來れり 判「其時初めて達したるか ミ「左様 判「夜も送たるか

百二十二

四時頃、カアチスの妻、高橋竹と知れるや、初て見たり。判、夜カアチスは何時頃歸りしか。九時比、グートナイトといふて歸れり。判、歸りし後は未は有しか。居ないやうに覺へたり。判、九時比に未方に有しは誰彼なるや。カアチスの外にジョンソンといふ者來つて、自分はヲスキエーを與へたり。家内等は誰か居たるや。知らず。判、ジョンソンは何國に居るか。知らず併し能く見る男なり。判、其夜、米人、ケルン、ウオードが來りしか。判、知りません。判、被告の寢たるは何處か。不斗眠の覺し時はヤードの中に寢て……此時は顔に赤みを帶て顎骨は甚だ動きて、呼吸を急かしき様子なりし。小林はヤードといふ事を庭と譯したり。尤もヤードは分らぬ事、有さうか。判、寢た處が分らぬが。判、カアチスの歸り

百二十三

し合、抄を知りしのみにて跡は一向に覺へず。判、いつでも未方に泊る時は何處に寢るか。金を預けた晩は二階へ又或時は下へも寢たり。判、未方の戸を明ける鍵を知るか。判、イ、エ。判、被告は目の覺る迄、外出はせざりしや。判、ヤードに寢る位ゆへ何も少しも覺へては居ず。判、ヤードとは如何なる處ぞ……小林も通譯に苦しんで何とも云わず。秋山辯護士は注意を與へて。秋、通譯へ通ふ處、あらん……トいふ。ミ、ラ、イも左様ですと答へたり。判、味なりし。判、家根の無處か。判、ハイ。判、下は石か土か。判、石もあり土もあり。判、敷物は。判、なし。板一枚有たり。其板の爲に手が痛し。故に記憶しおれり。判、目を覺せしは何時比か。判、真暗なりし故分りません。判、裏口は締り有しか。判、明んどせしも明かず。判、夫より何處へ行しか。判、……判、暗くして何處へも往けず。便處へ入しも酔ふて忙然たり。判、便處にはどの位居たるか。判、心の判然

せし時に明らくなつたり 判夫から戸を明けしも明かず表の戸  
 を叩きしも明かず何時かど間にセームスカアチスの方へ行けり  
 判其人は克く知る者か ミ上陸後二ヶ月間知り居れり 判其家  
 は酒を賣る家か ミ然り 判其處で何をせしか ミ自分は知ら  
 ねど酒を呑んで二階へ寐たりと 判同行者は無か ミ是も自分  
 は知らされどアレナンといふ者と一緒に行しどカアチスハ語た  
 り 判知る人か ミ知す ミ其家に縛縛されしか ミ左様 判  
 十六日の夜中則ち十七日の朝迄に外圍方にて末と秋とウオード  
 が殺されしは被告の處爲には非ざるにや ミ自分にてはなし……  
 とはいへど例の骨は非常に動くを見たり凶器の關へに成ので  
 判是を見た事が有か……ト 鏡鏡を示したるも格別面の色も變ら  
 す ミ見し事はなし 判末方にて氷を砕く時に用ひたるを知ら  
 ぬか ミ自分が戸を修繕時用ひし鏡鏡は是ではあし 判末に判

刀を預けし事があるか ミあり 判是を受取しや ミ左様 判  
 其剃刀は如何せしか ミ十六日の朝カアチスに與へたり 判其  
 他に剃刀は有さりしか ミ有ません…… 其折剃刀の折を示した  
 るに平然として ミしらすカアチスに與へたるは新らうして  
 眞直なり 判十六日に着せし其方の衣服は ミ上着は白にして  
 ツボンハ黒併し四時と六時の間に雨の爲に濡れし故に着替たり  
 ……所々は血痕の付たる跡の有フランネルチ大名袴のシャツを示  
 したるも ミ穴だらけだ自分の物ならずと思ふ然し倍く似て居  
 るなり 判夫は鑑定の際に切取しなり ミ又穴があれば着る筈  
 もなし……ト口の減らぬ事を云ふたり肩先に血の付たる飾り  
 ヤツを示す ミ自分のではあし……ト上衣と同じツボン並ひに茶  
 の帽子を見せたり ミ是は自分のらしく覺ゆ……證據關へが仕  
 舞に成まして判事は檢事に向ひ 判確證人の證言及び豫審の問

百二十六

書の事實と公訴とは如何成關係有か……… 檢事は立て 提自身證  
 の調書に百三十三番館に如何成兇行ありしかを知るに足る田中  
 お留が前後三回の申立は漸々と變り居れど最後の申立は眞實也  
 被害者なる末とミルラーの關係を知る又米國の領事ドモール  
 第一回の調書はウォートとミルラーの身の上を證明する處あり  
 小池糸太郎の證言は兇行の何時比に有しかを考ふるに四時過な  
 る事を明らかにし且衣服は犯罪の證據にしてカアチス方にてヅ  
 ボンを脱代へし事ウスキニーを出されば銃砲にて殺さんと云  
 しは性質の亂暴あるはカアチスの證言に依れり本職の考ふる處  
 にてはチルソソウオート及外岡末鈴木秋を惨殺したる犯人は被  
 告なりと斷定するに憚らざるなり………ト 論告して座に付たり辯  
 護士秋山源藏は立て判事に向ひ 秋證據關へ進行前に被告に尋  
 度事あり………と 裁判官の許可を得てミルラーに向ひ 秋十六日

百二十七

に飲たる酒は何か ミ「ウスキニーなり 秋何處の製造か ミ「日  
 本にて釀れり 秋上等か ミ「一ガロン一圓位の下等品なり 秋  
 何の位飲たるにや ミ「よくは覺へねど壺二本位は飲たるならん  
 秋何時より何時迄の間に飲しか ミ「朝五時より九時迄に 秋他  
 の酒は ミ「飲まず 秋日本製のウスキニーは何處にも有か ミ「  
 西洋小間控屋にゆけばあり 秋過日監獄署に 被告に近接たる  
 時其頭部に古傷二三ヶ處有と見たり痛む時有か ミ「折にふれて  
 痛みあり 秋酒を飲し時の痛みは平常と違ふか ミ「四五日位痛  
 む事が有り升………牧野辯護士は問ひ起さんとするを裁判長は止  
 めて 判其底の原因は如何 ミ「廿三年前香港クエンズポートと  
 いふ處の銘酒屋にて英吉利の軍艦の水夫と米國軍艦の水夫が喧  
 嘩せし時に自分も飲居たる爲此傷を受けたり 判其爲に醫者に  
 係りし事あるか ミ「一時は左の眼の視力を失ひし位故に醫者に

係たり 判何年比か ミ千八百九十一年あり 判横濱上陸後醫  
 者には ミ係らす 判九十一年后には甚た腹痛みはなきや ミ  
 今でも十分や十五分は忙然とする事あり 判被告の酒量ハ ミ  
 葡萄酒や麥酒ならば余程飲なり……ト裁判長の問の了りを待ち  
 收野辨證士は立て 故ヘンリーハ知れるか ミ一度も逢し事な  
 し……唯一言を問たる迄なりし検事が口を開いた 檢末の家賃  
 ニク月を拂ひたるヘンリーより聞しと最前は云ふたり如何  
 ミ未から聞たりといし……問達は知れたり辯證士高橋庄之助  
 は立て 高亂醉して前後を忘れし事は屢々有か ミあり 高十  
 六日には家の外へ寝たりといふが何の爲に外へ寝しか心當りは  
 無か ミ知らず朝起し時晝して倒れんとしたる位ありし 高  
 被告の父母か祖父母の血縁に犯人に成りし者は無か ミ卅五年  
 前に姉は亞米利加のカナダ地方のマコトパーの地へ嫁入りした

りしか其地方の土人が一掃を起して其近邊の男子は皆殺しに逢  
 せられ女は輪姦の難に逢たり姉は其中を一人退れて出たるも古  
 郷へ歸る途中にて發狂して入水して死したりと云傳へり外はし  
 らす……ト被告も可成共退れんとする人殺しの狂氣辨證も古手  
 は有升けれど此方が……せん

第十八席

高領事シドモールの調査に前犯は無れど氣は輕く船長杯に打れ  
 し事ありと有か左様か ミ度々あり……辨證士井上八重吉が  
 井被告はヨロヘンリーより委任狀を書て吳よと外岡より頼  
 まれたりと有か日本文か英字にて新たに書しか ミ英字にて自  
 分か書たるなり 井普通の委任狀か ミ委任狀といふ物ではあ  
 し紙切へ認めし迄にて唯警官へ見せるに止まりしなり 井夫は

ヘリ、ノ一より末に與へたるやうに書たるか、ミ、七月十四日に書  
 たるも五月の日付にしたり其意味は其家及びひ総てはミルラに  
 管理して貰ひたしといふにあり………質問は盡たり、判書類に付  
 て合議すへき事あり其前辨護人より申出る事は無哉、秋、十六日  
 の夜被告が飲たるウスキユ一と酒類を求めて衛生局へ分折せ  
 しめ且醫師をして頭部の鑑定をせしめられん事を願ふ被告の如  
 き身体に對してウスキユ一に如何なる影響を起すへきや被告に  
 とりて必要なる事也と思ふが故費用と時日は要すれど内地雜居  
 はしめての出來事故充分満足し得へき御審判を希ふ、高、秋山辨  
 護人の申請は願ふ處也三名の被告者の死方は實に慘狀を極めた  
 り其殺害されし跡へだも殘害を加へたりと見べき跡あり如斯は  
 理性の有物のなし得へき處に非ず然るは如何成刺撃に依つて起  
 るかを研究するの必要あり、井、私は外に又申請ありフレットゼ

一、ムスカアチスと田中留高橋竹を喚問有りし時被告の精神の  
 模様舉動を聞たければ也………檢、秋山辯護士はウスキユ一を何  
 處から求めんとするか、秋、居、酒屋の如き處には大体ありと聞け  
 ば取寄られたし、檢、要するに秋山の申請ウスキユ一は被告の肉  
 体に精神に影響を知らんとする者なれど本職の如きも被告の精  
 神上に付て特に注意を加へ入糧の後醫師に診斷せしむ格別の異  
 特なく唯酒の爲に脈搏の高きに止まり決して狂人と見るべき點  
 なく故に秋山の申請は不必要也、又被告は日本人と違ひ權利を主  
 張する男故精神錯亂とは認むべからず慘酷の所業とはいへど外  
 國には往々如此事有との事なれば申請の必要なしフレットカア  
 チスと田中留の喚問は本職にも異議なし高橋竹は必要なしと思  
 ふ、高、檢事の意見を聞て彌々被告の肉体鑑定を必要と思ふ彼に  
 して脈搏多しといふなれば彼は已に狂性を帯居るに非ずや………

と判事は合議の上を決せんと暫時退廷して三十分再開廷し、判田中留とカアチスの召喚は井上辯護士の申請の如く又セームスカアチス深口勇吉齋藤繁太郎を呼出さん秋山辯護士の申請は取調進行の都合によりて許可する事も有べし……ト宣告し零時三十五分一先閉廷と成まして午後二時廿五分開廷英の狀師アツマアを飲さし已にて他は捕ふ 判是より證據調べをなささん……井上八重吉氏が起立して 井其前に態度はヘンリーの名を以て警察署へ出したる願書の署名は何者がせしや其書面は代許人の澤口勇吉が所持すべければ持参する様命ぜられたし……是より檢證調書則ち豫審判事が現場へ出張して作りし物を讀上げ且小林に通譯せしむ三人の死狀の處に到るや被告の頸骨は頰りに動さ睡を呑んで居たるは舉動にして價直有が如し 判末方の階下の影に突込で有し此襦袢は其方のにてはあきや 判見た事だに

なし 判鐵槌の天窓に流しの隅より出たるが 判夫も知らず判調書に付て別に申立る事はあきや 判なし……夫より判刀の折高橋幸、小池糸太郎、南京人陳番の調書を讀聞したるも何も知らねばいふ事なしとて取合す 判被告が豫審廷の申立と當法廷にどの申立は異れり其相違の點を云わんに豫審にては十六日に英人フレットカアチスと末方に酒を飲みて四時半五時頃に寝たりとい、他處より歸り來て戸外に寝たりといわぬか如何 判ソんな事はいわず 判十七日の朝外岡の家を表裏いづれより出たか知らんとは如何 判夫を知つて居る位なら此へは來させん……ト語氣強く聲を叩いたりし 判豫審廷にて縮のシャツを見し時は自分の物也と云しは…… 判最初なしといふた 判上衣は豫審判事の前にて取られしか 判左様 判其上着に血の付たるを板の間へ寐し時の汗染なりと答へしは 判そんな事はいわず



判ツボンを二通り持しか  
ミ左れば 判夫を末に親んで洗滌  
へ遣りしといしは如何  
ミカアナスの家に泊り居る者共に渡  
して洗滌して貰ひ外の物と一緒に置けり  
判豫審にて末方に  
頼みしといわずや  
ミいわず 判末及び二人の女に邪摩にされ  
たる事ありとは  
ミ別段になし唯罵詈雑言されたる故耳を引し已  
り 判五月十六日末方の名義人に成て呉よと云れし時承知せし  
と有は  
ミなし自分は十五日にカルホルニヤへ行船へ乗積りゆ  
へ断つたり末は十七日にヘンターの爲にしたしといふたるあり  
判警察へも行といしに非ずや  
ミ必要あれば何處へでも行  
といし也 判七月十六日午後三時比に至つて末は疑心し被告  
の名義にするを止めヘンターの名義にせんとせしに非ずや  
ミ  
ヘンターの名にするるあれば名札を拵へて遣らうといふた位なり  
判心變りせしを憤懣した事はなにか  
ミあし 判豫審にては

告を放逐せんとして手を引て出され憤らしき事をしたれば腹立  
しく誰と其家を出さりしといしは如何  
ミそんな事はいわず  
通譯の間違ならん 判前の申立にはさう有  
ミ更にいわず 判  
十五日の朝から酒を飲む事を末から拒まれしと云しは如何  
ミ  
主婦の物を呑ではいかにといしやう也 判夫を你は概から出  
して飲しか  
ミ貰わぬ物を飲し事あり 判飲初ると止めのが自  
分の癖たといししか  
ミ夫は上陸の時いつてもするなり……ト  
時に五時を報したれば法庭を閉ちたり九日の開廷と聞へたり

第十九節

九日目は好奇心に惹かれて傍聴者をも増したれば白洲も又百冊名  
入れる事には成ました開廷するや秋山辯護士は被告の顎骨の動  
く事を問たり辯護士諸君の考へは兎角病氣に依らんとし被告は

寝て居て知らんといふを唯一の楯とし通譯の誤りを先陣として  
 退れんとす裁判官の骨折は又察すべき事ですミルラーも又去る  
 者なれば合衆國にて受し傷なりと誰も知らぬ斬しをなし二三の  
 應答は濟たりし夫より秋山氏は問ふて 秋衣服は今迄何處へ置  
 しか如何 ミ現在のカーチスの處へ 秋いつ頃より ミ七月の  
 八九日より 秋外岡方には ミ一社もなし 判ヤツは何枚持  
 しか ミ今は分らず上陸の時には二ダアス持つたりト秋山辯護  
 士は襦衣とミルラーの寸尺を取ん事の許可を得てラツタアに云  
 付て寸方を取りたるに襟は十六吋手首八吋丈三十三吋手の長廿  
 三吋にして大同小異なりしは結局被告の物たるを證すに過ぎり  
 し 秋檢察官の證據引用に付て襦衣は階下カにありしといわれし  
 が如何成處カに有しや 檢極狭い處五寸程の空處に丸めて有し也  
 秋此鐵襪は三人共に用ひしか 檢然り 秋重に何れの方を 檢

瘡が橋梁形の多き處より考へて見れば齒形の方を遺ひしならん  
 ……傷 付て種々の間を起し檢事も又答へられしも答す秋鐵襪  
 の柄は隠す爲に服しか 檢夫は不分柄は寐臺の下にありて天窓  
 は流しの下にありし 秋三角の鏡りは 檢遺ひしか知らず 秋  
 剃刀は 檢柄の方に血の染てあれば遺ひしならん 秋兎行の際  
 には帽子上衣ヤツは着て居たものなるにや 檢分らね共何れ  
 も身邊に有し物ならん 秋被告に大關係あれば… 檢自分違  
 の見解にてよし… 井上八重吉が 井檢察官のお調への時々末  
 方に金子の有し様子なるにや 檢末の寐臺の脇の鏡にあり其  
 傍に日本の財布が落ちてありし十錢銀貨を見たり 井ウオートに  
 は金は無ししか 檢調べされは知らず…と夫より檢事はミル  
 ラーの疵に付て種々の質問有たれど總て略し升午前九時五十分  
 成まして證人なるセームスカアチスは呼込まれたり年齢四十位に

ミ ル ラ 1 事 件

して紺のセル地の袖の邊に緋ある上衣を被て同じ汚なのメボン  
 淺黄模様の有るキヤラコの羽衣を着て頭部の中央の少し亢たる  
 と八字髭とは有だれと鼻低く額長く一見下等の人物あるか如し  
 裁判長の招きに応じて足を組めて其間に答へんと待たり 判呼出  
 し状を受けて出頭せし物に相違無か カハイ 判姓名年齢國現  
 住は如何 カセームスカアチス、卅九、米國現住は尾上町五番地  
 判證人として出延せしはミルラーに對する證言を拒むか如き事  
 は無か カ衣類を預かりたる已にて我家に眠りし事をし十七日  
 の朝及び其前に二三度着類を代たる已也……宣誓を願聞して署  
 名させて 判ミルラーは其方の家を日本にての住處とせしか  
 カ否 判ミルラーよりは何を預かりしか カ剃刀と水夫の用ゆ  
 る衣類となり 判其囊を開きて見しか カ警察官が見し時に立  
 合て見たり 判今日汝が預り居るか カ好き物は洗濯させて置

ミ ル ラ 1 事 件

たり其時不潔な物は捨させたり 判召使は幾人有か カ今は二  
 人 判ミルラーは其一人に洗濯を頼みしか カあし……此言葉  
 の折にミルラーはカアチスを恨めしさうに見上たりき 判七月  
 十七日の朝其方は何時比に起しか カ凡六時十五分に 判起て  
 直くに戸を明たるか カ明たるに酒場の後よりミルラーとブレ  
 ナンどが入来れり 判何時間位立て カ十分許も 判ミルラー  
 は何といしか カ二人前酒を飲せるといしも餘程呑て居る  
 から止たら能らうといふたり ミ夫から カ荒々敷聲にて酒を  
 出さねば砲撃するといへり ミ夫から カお前から来る彈玉な  
 ら喰てもいゝと笑ひながら酒を出したるにミルラーは廿五錢を  
 拂ひたり五錢餘計なればと返したれど受取りし 判貨幣の種  
 類は カ十錢銀貨二と五錢の白銅貨と 判血が付ては居ざりし  
 か カ氣が付ませんでした 判夫から カ初めウスキューを出

したり次にホート酒を出したり併しミルラーは飲まず後に呑ど  
いししより塚の中へ明けたり其後襦衣を着換たしと云たれば自  
分は承知したり 判夫から カミルラーは二階の長椅子に横た  
わたりたり 判ブレナンは カ軍艦へ乗ねばあらぬと歸れり 判  
彼は知る者か カ何日来事有り 判ミルラーと来りしか  
カイ、エ他の人と 判軍艦へ確に乗るといししか カ領事館の  
周旋状を保持たり 判偽りを云は偽罪ある事を知れるや カ  
知れり 状袋は領事館の物に相違あり尤彼は乗艦を許されずとの  
事也 判フレットカアチスを知るか カ十六日の午後に来たり  
其時雨が降居たり 判何時頃か カ時計を見て居ねば確とは知  
れず 判何の爲に二人行しか カ飲に來れり 判代は誰が拂ひ  
しか カフレットが明日拂ふと切符を出て往きたりし血斑々た  
るフランネルを着して 判十七日 ミルラーが着て居た物か

カ其物あらすとするも酷似て居る 判此洋袴は カ同じ事なり  
判カカラの先に一寸見覺へあり 判被告は證人  
に尋ね度事は無か……ミルラーは忌々し氣に立て ミ標の處が  
どふして分る カ外の預かつて居るシャツと同じ物なれば ミ  
彼は英國の法廷と違つて宣誓せしを知らざる者なり……ト馬り  
て止す 判辨護人は證人に問ふ事は無か 秋トシャツの汚染は  
カ氣が付す 高十七日にミルラーのツボンには血の付て有し  
なるに カ酒の汲場の高ければツボン迄は知らず 高縫りし  
動は無か カ別段なし唯例もより酔ふて居たるのみ……高橋庄  
之助氏は判事に請求して 高刺刀シャツ其他の物を提出させた  
し 判刺刀は何の必要か 高證人に與へし物と法廷に有もの  
鈍銃を比へたしシャツも又其通り也……判事は檢事の旨を聞け  
は 檢刺刀は本官送もミルラーの處有品とは思わす比較する事

も有まじ……判事も必要なしと取らす十一時となりてセームス  
 カアチスを退廷せしめ入代つてフレット、セームスカアチスが入  
 来れり瘦形ちにして脊高く膝もなしリンネル立襟の上着紺子ル  
 地のスポンを穿ち熊度活發なり判事は本人なるかを問ひ名國籍  
 年齢を問へは名はフレットセームスカアチス當月廿九日にて満  
 四十二才英國現住は百卅三番館元は英國海軍の軍人なりしが二  
 年前横濱へ来りオリ、エン、タルホテルに居れり今は本町通り五十  
 五番館ポップ方に雇われ料理人なりと答へたり其後宣誓をなす  
 判高橋竹は妻か フ法律上の妻にてはなし二三年間には正當の  
 結婚をなす筈あり 判外岡末と高橋竹と友達成を知か フ此方  
 よりは參らぬも末は一ヶ月に一度位ひ來る事あり 判七月十六  
 日正午比末方へ行しか フ發問あらず午後三時半頃なり 判證  
 人はセームスカアチスを知るや フ同名の者ありと聞し已 判

十六日の夜ミルラーと共に其家に行しか フ一掃に行しに非ず  
 セームスカアチスと共に酒を飲居たる時ミルラーか這入來れり  
 判酒の馳走せしか フカアチスが馳走をしたり 判明日拂ふと  
 て切符を出し事無か フ決てなし 判十六日の夜竹と共に末方  
 へ參りしか御用向は如何 フ百卅三番のアービトレンジョンの  
 家の名を聞に行し 判何の爲に フ醜酒屋を妻にさせんか爲家  
 を借る手順です 判末も行しか フ末が案内して 判末の歸り  
 し時は フ妻は八分程に末は十分程立つて歸り來れり 判行し  
 後は フ自分はジョンソンとミルラー女中二人なり一同へ酒を  
 振舞ふたり 判其酒の高は フミルラーが一杯私とジョンソン  
 が二杯 判酒の種類は フ和製のウスキニー、判其味は フ本  
 國のより悪し價も安し 判人を酔せる工合は フ三四杯飲は倒  
 る法ならん 判自身の酒量には フ普通にもて 判味酒のウスキ

キスーならば フ人により  
ト是はフレットの申立は悪いや

第二十席

ミ ル ラ | 事 件

判外岡方を出しは何時か  
居しか フミルラー及び一人の女自分及妻  
判其方の歸りし後ミルラーは如何して有しか  
け椅子に眠れり歸る時はグイトナイトといし  
て何かいししか フ時計を見て妻に向ひ明朝早く出さければ  
らぬ用が有から早く歸らねばならぬといへり  
りしか フ八時半といへり 判チルソンといふ者は来たらざ  
しか フ来らず 判證人に尋ねる事は無か  
達し時に酒を馳走せし也 フ左れば  
二人共にカアチス方に

ミ ル ラ | 事 件

ても飲たり フ左様  
人が酒を奢つたり又外岡方へ歸りしは六時あらんか  
判證人は三杯飲たるやうなれどもろんきに飲んでも翌日の仕事  
に差岡はなきや フ平常の通りです 秋十六日午後三時頃  
フ一は酔ふて居たるか フイ、エ 秋夜は フ酔ふて居ず 秋  
證人は英國製のウスキニーは何杯位飲か フ十杯でも十二杯で  
も併し日本のは四五杯が漸々なり  
ル示せば フ此衣服らしと思ふ 判證人は午後迄控へよ時に正  
午閉廷す午後二時五分開廷すれば 檢神奈川縣監獄  
はミルラー入監以來診察を見る者にて只今用事有て當職の許へ  
来てあれば當法廷へ呼入れたし 判辯護人の申請も有は幸ひ  
也 ト古矢嘉助氏入來り 判今日檢事局へ來合せし由に付昔  
通の手續を経ずして證人とあさんとす異議や ト異議なしと

ミ ル ラ 1 事 件

の事あれば姓名職業宣誓に及んで后 判其方は一級囚人の身体  
を検査するか 古たれば 判ミルラ一の身体を見しか 古初て  
見しは七月十八日也 判身体に異常有しか 古頭痛がする身体  
かたるひ食事が進まぬといふ訴へなりしかば診案せしに左の  
鬚と眉間に古傷あり左りの頬に摺たる疵あり脈博を試みしに手  
を震を起す外は尋常おれと否は通常ならぬ黄色を帯ひ眼は結膜  
に充血て居たり其後二回診案せしも何事もなし 判被告は大酒  
なるか酒好の急に酒を止れば身体に異常か有るか 古頭痛も矢  
張其邊の起因なるべし……辯護人の問は有たれど面白くも無れ  
は畧す證人古矢退廷す午後二時四十五分被告の滯身の借したる  
目的物たる田中か留は證人として入來れり久留米飛白の浴衣  
光澤子と友禰の願合せの帯をしめ銘仙の前掛にてミルラ一  
尺斗り放れて恐るゝ色あく扣へたり 判名は 田田中留 判身

ミ ル ラ 1 事 件

分は 田平民 判職業は 田酒師 判今居る所は 田元町四丁  
目の渡邊お六方 判横濱へはいつ來しか 田十四の時 判末方  
へ雇われしは 田七月十二日晚から 判とふ云ふ極で 田月貳  
圓で 判末の家の外に女は居しか 田秋ちやんといふ廿二三に  
ゑる女が 判末方へ初て行し時ミルラ一か居たか 田ハイ 判  
續て寝泊りをせしか 田毎晩 判末の處で食事もするのにか 田  
イ、エ泊る丈で 判酒は能く飲しか 田酒場へ這入ては一人で  
飲のですいけ無といふと怒るのです 判さふいふ事は毎日有か  
田ハイ 判重に酒は何を 田ウスキニを 判一度に何の位  
田コップに一杯位 判飲た後で頭が痛いといふことは 田有を  
せん 判一杯位では酔ぬか 田中を酔ませせん 判酒の代は 田  
拂ひませせん…… 判末とはどんな關係ぞ 田克くは分りません  
が何です名前を借やうと一度嘸して夫から後で否に成て居るの

を胡摩を招つて居るのです 判借る氣か有たか 田最初は有たのだ人を殺した事も有といふのを聞てから止うといふ事に成まして 判ヘンリーより來た手紙を見た事が有か 田イ、エ 判石倉香太郎清香を知り居るか 田私が行てから二度程來ました英一番に居り升 判末どの關係は 田ハイそうです……心島い事で…… 判ミルラーと喧嘩をした事が有か 田十五日の晩主人の留守に此異人が酒を飲うとしましたからいけせん云つたら生意氣な事をいふおと私の首をしめました口惜紛れに引括ました一姉さんと秋ちやんが來て早くお送隠袋から小刀を出して突からと申て私も是から人のワイフに成うと思ふのにナイフで突れては…… 判生意氣とは日本の言葉でいふたか 田英語でナイフといひました 判ミルラーハ何處へ寝しか 田酒場の脇の長い腰掛へ 判十六日の晩フレッドカアナスが來て……

ラーに酒を飲せたか 田姉さんが歸つて來てから飲ました 判カアナスの歸りし後ミルラーは如何にせしか 田腰掛に寝て行ました 判ミルラーは其晚自分で飲しか 田酒場へ這入て煩いから主人が一杯やれと申ましたから遣りました都合で二杯飲だ切でした 判カアナスの歸りし後に未は居りしか 田何處へか出て行ました 判いつ頃歸つて來しか 田十二時頃でした私か長い腰掛に寝て居まして秋ちやんは二階へ寝た後でした私は夫から起されて泊りに往きましたので 判其方が家を出る時に、ミルラーは 田よく寝て居ました 判ネルソンは來らさりしや 田イ、エ 判事は泊り先を聞いたも小聲にして分らず島は大きな聲でいへ無からです 判一且ミルラーの出で行しか 田姉さんが店も暇だから喰せる事が出來ぬ出て行て呉るといふたら剃刀を返せと暴れまして夫から又寝たんです…… 判



其方は十七日の朝何時頃に歸りしにや 田七時半でした 判表はさふ成て居た 田表の明きませんから裏へ廻つて見升と戸が建掛つて居たから夫を明けて這入りました 判夫から 田店へ往つて見ると異人は寝て居るから能く見ると血が流れて死んで居たのです是程の騒ぎを二階で知ら無かど上つて見たら二人共に殺されて居たので其足で門番の小池さんに告たのです 判死体へ觸つたか 田イ、エけれとお春さんといふ人が姉さんを觸つたら温かまりが有たといふました……判母の尋問は了りました 檢鈴木秋とミルラーは中の悪いといふたがさうか 田末ちやんは喧嘩をしたさう口を利ないと云ました出て行けといひ替なて云ました……裁判長はフランネルのシャツを示したれば 田是は十四五日に取代へて來たので其前日には今着て居るのでした 判見張が有か 田編がさうなんです 判帽子は 田始終冠つて

……判此鐵櫃は 田酒場で水を欠く時に遣ひ升 判袋は 田よく知ませんが茶籠の上の道具箱の中に有たのでしやう……辨護士秋山氏が 秋ミルラーは日本語か了解か 田分りません 秋末は英語が 田分るやうです 秋お前は 田少し斗り 秋出て行は英語か 田姉さんは英語です私が何の事かと聞きましたら出て行けといふのたといひました 秋お秋は 田分りませんから二人で日本語で出て往けといつたら變な顔をして居ました 秋生意氣な事をナアセイといつたどふして云れた 田姉さん以後で聞きました……高橋辨護が 高チルソンを見たか 田一度も見ません 高證人が出かける時ミルラーはさう寝て居たか判事は熟睡といふたりと二三の問答は有しかと省きたり井上辨護か 井名義人の事ミルラーが末に話し替付を證しは何時か 田十四日の正午前 井十六日末は金を深山持て居しか 田一口

三國掛の頼母、子講の三會目で雇けてよこした處か三軒取に往つたのが二軒夫に店の賣金が有升から持て居ましたろう……此證書の必要ある處へ小林は通譯したる。判被告は證人にいふ事は「十四日の朝自分が末の部屋に書物をして居る處へ後には上り来れり。田外と掃陣をして姉さんが来て居ましたからハメキを替へている處へ此人が来て英語で話しをして居たから後で聞きましたら名前の人にしてみれば此人が證書を入れても能いとの話して有たさうです。夫は私から入るといつたのでは無へん。持て居る家たと警察署へ見せる書物を持て居たのなり。證人は「ムスカアナスと同じく眞實の中立とあるる者なり。田だつて姉さんがさういつた物。其書物をフレックアナスは見しなす……ト夫より喧嘩の申しに彼もしも聞しぬ。田中留は通譯して次にフレックアナスと呼びた。時に五時。判十五日か十

六日にミルラーの書し物を見し事が有か。判被告は見た。彼たど今のへり。二十六日の書ミルラーが此家を譲り受る書付を拵へたりと断せし事はあり其書付かを末が持来つて自分に署名して吳よと云しも和女なれば断つたり。判何の名を書て吳よとフ、自分の名を記して吳よといわれしも断つたり。近日自分も銘酒屋にならん考へも有はあり。然れば誤りならん……五時十五分なれば閉庭したり。

第廿一席

十日午前五時廿五分開庭し第一の證人として澤口芳吉を呼入たり。是は末の爲に營業願ひの代書せし人にて年齢は廿五身分は平民職業は代書及び物品販賣住所は元居留地百五十六番館ありと宣誓せしむ。判外岡末を知ら。澤廿四五年頃自分百卅七番の差

配をきし居たる比より知り 判本年に成て往來せしか 澤時々  
 來れり 判末の家内の情實を知れるや 澤末方へ参りし事ありし  
 判七月中旬營業願の書面を書と頼まれし事は 澤あり十三日か  
 十四日願書を認め呉れよと午前に来れり其時式寸四方位の西洋  
 紙へロバートミルラーと書たるを持來れり改正條約の實施に付  
 此者の名前にはせんと思ふ故願書を認め呉よと云し 判ミルラー  
 の名は日本字か 澤歐文なり鉛筆にて書てありし 判願書は認  
 め遣りしか 澤實施に付て清國人七八名來て混雜せし故後に取  
 り來いといふしに晩方に來る連立去たり其後頼まれし通り書た  
 るも取に來らず夕方教會へ行途中に丁度同家の前を通り書た  
 込んて遣たり 判其事に付て外に頼まれし事は無や 澤多分十  
 六日の朝ならん末が單身にて來りミルラーの名に付ては少しく  
 不都合の事ある故にヘンリーの名に書直し呉よと云來たり 判

前の書付は持來れるか 澤否夫より直に書直し遣つたり 判ヘ  
 ンリーの名は 澤明け遣つたり 判夫から 澤其日の午後三時  
 比名の知れぬ女と來たり 判其女の名はいつ知れたるか 澤其  
 女は七月卅日に營業願を書て呉と其折高橋竹と知れたり 判  
 ヘンリーと署名せし書付を受取し譯は 澤翌日則ち十七日に警  
 察へ届けて遣る事にしたなり 判其書面は持參せしか……出すと  
 見れば十行の青野紙へ營業願が一枚雇人の届出二枚にて有し  
 判是を書たるか 澤去れば 判ヘンリーの名は誰か書しか 澤  
 知らず 判ミルラーの名義にはどういふ故障と有か 澤直言す  
 れはミルラーはいけ無店を奪わるゝ恐れありといふにあり……  
 小林に譯さしむ ミ鉛筆にて書し覺へはきし十四日に書きしは  
 此人に見せる積り也 判其紙は ミ普通の洋紙の野紙あり時々  
 抜へ來し女が買つて參たり 判証人は見しか 澤記認せず……

百五十六  
 證人は退廷せり十時卅分齋藤繁太郎は年齢は四十三身分は平民  
 職業は若物小間物商住處は元居留地百四十九番館宣誓せしめた  
 り 判水菓子屋もせるか 齋兼業なり 判末を知るか 齋左様  
 判どふして 齋昨年七月より本年三月五日迄末は百四十九番に  
 隣同士にて居たり 判其頃末の商業は何を 齋洋人合人の飲食  
 店 判營業のを話せし事は無か 齋損易の勘定もしてやり金子  
 少しは貸して遣つたり 判移轉後も往返せしか 齋自分からは  
 行きませんか先方よりは時々参升 判改正條約の實施に付て營  
 業願の相談を受し事は 齋あり 判何日頃か 齋七月に入りて  
 度々せり 判どふいふ相談が 齋被告の名義にせんがヘンリ  
 にせんか婦人の名義にては車夫杯に錢に取れるも結らぬ併し此  
 人では案じられるけれど此異人が自分の名義にするのを危険を  
 思ふから確かを證文を入れるといつたりと聞私に證文さへ取置

百五十七  
 けは安心しても能かろうと云り 判其後には 齋十六日の午後  
 九時頃なるが末が参りてヘンリーの名前にしたけれ共今居留人  
 故警察で聞加しらんといゝ又百〇八番館のフイシヤア方に居  
 る若い異人に仕様かといゝしも私はろんな事をしたら先の異人  
 が怒るだらうといふたり 判末とミルラの關係は 齋よく知  
 れりミルラが初め金を遣ひしと末の處に居たる昨年十月頃か  
 ら下宿した異人が食料を拂わぬを取て遣りし深切に應じて自由  
 に成たり 判フイシヤア方に居る異人の名は知るか 齋其時は  
 知ず跡にてキルソソウオードとしつたり 判彼と末との關係は  
 齋遊びに来り酒を飲み雇人なる鈴木秋と深き關係あり 判借た  
 る金は 齋十圓也返したり 判末は外に日本人の情夫は無か  
 齋石倉香太郎と申者土曜日に來つて日曜日に歸る事にして……  
 ト辯護士 秋ミルラの自由に成しは 齋五月十日頃より 秋

百卅三番へ移りて間も無か 齋去れば……小林に譯せしむ ミ  
 證人が十一日に書付を見しといへ共自分ば書たるは十四日朝な  
 り 齋十一日に相違なし……證人は退廷したり十一時五十分井  
 上八重吉は立て 井澤口勇吉より出せし營業願ひはミルラーは  
 書すといへりウォートは有名の偽筆家の由にてミルラーに書し  
 て見て頂きたし……ト彼を通辭席へ呼出しヘンリーの名を書せ  
 るミルラーは碇の彫物の右手に震へながら書合せたり 判監獄  
 へ行し時金は持しか ミなし 判セームスカアチスの何處へか  
 上し覺へは無か ミ二階へ上りし時も無一文 判其朝廿五錢拂  
 ひしと有か如何 ミ十六日の朝七十五錢有しも朝飯に廿五錢中  
 食に卅錢二度に酒にて廿錢されば五錢が一個位しか有まじ……  
 正午なれば閉廷午後二時廿分間廷と成高橋庄之助は申請して  
 高石倉香太郎を證人として喚問有ん事を希ふ彼は末の遺産を相

殺し送葬をも營みたる者なれば法廷へ呼出しミルラーの有たり  
 といふ物末が平常に持居たる紙入其中に有し金子加害の兇器刺  
 刀を尋問有たし 判遺産の相続人お末の生前に有し刺刀を知と  
 思ふか 高事實上の夫婦なれば知るあらんと思ふ 判本職は必  
 要かと思ふ 高否被告が末を殺せしとすれば其原因は恨みを  
 合し爲なるべし書付を見る要あり何となれば其書附へヘンリー  
 が歸り來れば異議なく營業を引渡すべしといふ意味ならば被告  
 が末を恨まざる事明白ならん紙入に付ても先刻の證人も金子有  
 しといふ然らば強盜にても押入しには非ざるか刺刀も同一の理  
 由に依て確かめたし 判合議に伏せん……三判事は一時退廷し  
 殆ど廿分許りにして出來り 判當法廷は高橋辯護士の申請を却  
 下す第一ミルラーが末に向つてヘンリーが歸り來らばヘンリー  
 の名義に書換るといふ證文を入し事を石倉香太郎に尋んといふ

ミルテ | 事 件

百六十  
が如し若し證據有とするも夫は檢事の側より出張すべき事實也  
何となれば斯る證據をに入れても末方の名義人にならんとするは  
ミルラーの犯罪を確むるの所爲なればなり第二末が殺されし前  
まで金を持居たるは澤口勇吉田中留が證據に依りて明白なり然  
に殺害さるゝ迄其金の有無は時間も立たることなれば不明なる  
へしことに十六日は諸拂金錢の出入も烈疾日なれば蓋のうちに  
有しも夜に入て一文も無りしかも知れ難し又遺産相続者も一文  
も受継すと云ひ何にもないといへば夫違ならん第三剃刀は末の  
物にして香太郎が見受へありとすれば辯護士の希望に副わず香  
太郎も同居に非されば末の物あるや否や見分るに困難あるへし  
よし末の物ならずとするも秋の物あるやウオートの物なるやも  
知れず何の効か有ん依て嘆問せすト是より證據調査と讀上る事  
に成まして第一に米國の總領事ントモールの調査と讀升被告と

ミルテ | 事 件

ウオート二人平素の品行善からざる事船を脱たる當時金の有無  
の事ありしもミルラーは何も知らず辯護士にも議論無れば次に  
フインヤアの訊問調査に移れり是はチルンウオートに千二百  
圓計りを詐欺されたる事已多し是又論をければ次に英人ジョン  
シー、ハレットの調査を讀む是はミルラーが九十七番なるハレッ  
トの許へ行て飲食し一月許り前に同じ九十七番館の銘酒屋ハア  
ナード、ケーン方へネルンと來りてケーンとチルンの咄しを  
したりといふにあり ミ「誰が私に聞せしといふにや 判混雜を  
した調査なれと被告がケーンに話をしウオートの事を悪くいふ  
たりと云ふに有 ミ「そんな事はなし呼んで貰ひたし……ト怒色  
を帯たり 判「もう少し先迄調査を讀で其上の事に ミ「何でも其  
人に逢たし必ず主張する所を改むべし 判「ハレットは被告がウ  
オートの事を馬鹿だとか畜生だとか云しを一度聞し已と ミ「一



告の身に及ぶべき質を調へて頂き度 判合議せされは明後日の  
 開廷迄にせん……五時十分也第四回の公判十四日には辯護士、牧  
 野磯雄氏は控訴院に用ありと登前は欠席したり然してウスキユ  
 一の鑑定はせずとしてシヨントルツトならびにハローツト、ク  
 ーソを喚問したるも結局悪口を確むるに止まりて退廷したるは  
 十時廿分にて有し茲に事實の辯論は盡てければ検事提定次郎氏  
 は立て左の如き論告を告したり明治卅二年七月十七日横濱尾張  
 町通り百卅三番館ライシング、サレイソ外岡末方にて一の惨劇を  
 演したり此事たる被害者は階下に於て西洋人一人階上に於る我  
 國婦人二名にして發見せるは同日七時三十分頃なりし屍体はい  
 つれも大負傷にして流血淋漓たり而して其傷を檢するに頭部は  
 皆炎處へ命中し居れり其模様より考ふるに被害者は抵抗力なき  
 熟睡中に手を下したる物と察せらる且洋人の切害せられたる階

下に剃刀あり階下なる二人の屍体の傍らに鏡鏡あり其柄共髪  
 物は階下の人に知れざる處に隠してあり又二階の階子の段には  
 血痕の印せるシヤッありし殺害の時間は外國の隣家請人陣万の  
 證言には午前五時十分頃打撲の音や女の叫ぶ聲を聞しとあり又  
 小池糸太郎の證言に百卅三番及百卅四番の瓦斯を消さん為午前  
 四時過通行せしに何等の異状も無しと有に依て四時過の出來  
 事也醫師の言に依も十七日午後一時卅分より起算して十時間を  
 過さる間の出來事也といへり本職も又石油の盡居たるより同時  
 間と鑑定せり扱階下に倒れ居しはテルソソ、ウオットなる事は米  
 國の領事ドモールの證明にて知れり他の婦人の一名は其家の  
 主外岡末一人の雇女鈴木秋ある事檢證の時知れし處なり然して  
 此犯罪の下手人は果して何人なるや本職の見處にては被告ミ  
 ルラ一成を知る其證憑は十二日より百卅三番館に借われし田中



留の証言に依れば十六日の午後外出の時外岡末鈴木秋とミルラ  
 三人の外他に人の居らざりしといふにあれば被告の外に下手  
 人の有へき筈なし且被告自身の自白に依るも同夜末方の長椅子  
 に眠りしと有により其事實を確め得へし被告は公判廷に於て當  
 夜は便處の傍らに寝たりといへ共小池桑太郎の証言に依れば瓦  
 斯燈を消したる歸途便所の傍らを通行せし際ミルラの横たわ  
 りしを認めざりしと有己ならず田中留も翌朝七時頃歸り來りし  
 時裏口の戸開きあり去ればミルラの外居りし者も開けし者も  
 非ざりしと証言せるより見れば被告の陳述の偽りなりとせざる  
 べからず殊に十七日の朝六時頃被告がカアチス方へ直ちに行し  
 と自白せり又被告の衣類……ミヤツ及び血痕は被告が初め檢事  
 の取調べを受し原自身の物なりといへり然るに其後豫審判事が  
 取調べの節此ミヤツは階段の下に隠し有し物也と告しに前の言

を食みて自分の物に非すと主張するに至りたり而も初め檢事の  
 間に對し咄嗟の間に自分の物也と答へしは虚偽の陳述を爲す余  
 希なき時なれば眞實物歸りたる物と見るべき也又此ミヤツに關  
 しては證人田中留カアチスも同じく被告の物たるを證明せりカ  
 アチス此ミヤツは十六日に被告が着て來りし物に似たりといひ  
 被告は十七日にミヤツは着て居ざりしと主張するも被告の身体  
 の寸法とミヤツの寸法とを比較するに行丈共に相當す上若は豫  
 審判事の面前にて押収したる物にして血痕あり被告は此血痕に  
 付て板の間に寝たる爲也といへど田中留の言によれば十四日か  
 十五日に着換來たりたるのみならずセーカアチスも克く似  
 たりと云り此豫審の時ブレナンも十七日の朝ミルラが着した  
 る物也といふフレットカアチスも同様の言を爲せり被告に着し  
 たるズボンには血痕斑々たるのみならず肉の組織の一片着し目

りて其所有者は被告なる事田中留の証言及び其ツボンは一  
スカアチス方に有てカアチスが證明して警察へ引渡せし事は争  
ふへからず又證據の帽子は被告が監獄に居る時其證據品の内よ  
り押収したる物にして肉片は若し居れり醫師の鑑定によれば肉  
の脂肪の一部にして被告自身すらも此帽子は自己の所持品に似  
たりといへり是等の證據のみにもミルラーのあしたる兇行は  
充分なり扱是より此謀殺事件は一人の處爲なるか数人の處爲を  
るかといふに現狀の證據及び醫師の診斷によれば三人の屍体は  
皆同一の死狀なれば一人の處爲也といはざるへからず察するに  
被告は被害者の熱睡するを待つて一人にても容易に兇行を遂げ  
得へきやうに成したる也と室の中に器物の取亂して無は一人の  
所爲にしてミルラーの業也次に被告と被害者の關係を述んに被  
告は外岡末方にて末を意の如くになし又末の爲に貸金を取立て

遣りし位にて改正條約實施に付銘酒店開業の名義をヘンローに  
せんかミルラーにせんか逆末か苦心をしたりし事齋藤繁太郎の  
証言にて知らる所て末は遂に被告と名義の事を相談するに至り  
當初は末の方より被告に頼みしも后には末か被告に冷淡にして  
却て被告の方より熱心に自分の名義になさん事を謀るに至れり  
決して末に迷惑を掛ぬとの證文を差入一度ミルラーの名義を以  
て出願する事となり代書人に願書を依頼したる事有し併し併は  
末が安心してミルラーの名義に成んど欲したるには非ず何とな  
れば被告か種々の方法を以て末に迫り又種々の關係より末が拒  
む能はざりしに依れば也被告はチャイム一號より上陸の節四十  
四弗三十仙を所持し後木收にて得たる金員有しも悉く消費し遂  
に何處にても宿泊を斷わらるゝに至り末の家の外に又求め得ず  
故にミルラーが自分の名義になしおかけは末方の主人より飲食

をせしむるにせんと思料せり然るに末は一旦被告の名義にせんとせしむる被告が組長なるより末初め借入人等も前意を懸へし十六日の朝末等は無情も被告に對し被告の名義に爲事は取消により今より直ちに立退へしと迫れり又被告と鈴木秋との關係は從來被告が勝手に酒場に入時は秋は是を睨めつけ又は拒絶する揚句の果は喧嘩口論に了る間柄己ならず十六日の朝秋は末に加擔して立退を迫り剩さへ末に對して被告を名義人とあす時は遂に主人顔して持て余しとなるは必定なりと説得したる爲に被告は其朝末の寢處より追歸するに到れり被告の憤恨余り一家の撲滅せんとして殺意を生したるは此時よりなりテルソンと被告との關係はウォートは末の家にては大金を費消し齋藤繁太郎より末が借入たる金も此費せる内より返却せる程あるに加へてウォートは酒場たる少年あれば末方の待遇も善かりし而してウォート

が末方の待遇の善かりし時はミルラーが冷遇を禁りて有し際なれば被告はウォートを知らぬ筈ありしハアレソットの殿言に依ればミルラーがウォートを罵詈雑言せしは其知り居りしと認め得へしと云り被告とウォートは末方にて其待遇の遠ふ所より被告は大にウォートを恨み居りし十六日の午後十二時迄ミルラーは其朝一家の者を殺さんと決心し是を執行せんと思ふ所へウォートが來りし也ウォートが末方へ來りしは十七日の午前零時此分頃なる事は中島かつの証言する處ウォートが末方に來りしは飲酒の爲なりしといへ共其實は宿泊する處存ありしが如し此時被告は企てつゝ有し兇行の邪魔者と考へしのみならず恨みに相みたるウォートあれば供に殺さんと決心したる也斯く第一にウォートを殺害し次に鈴木秋を死に至らしめ最後に向ひしな

り開は末の死したる處に鐵槌の柄の折れたるが疑ひし有るを以て證するを得可く是を要するにミルラーは十七日午前二時比一人にて前記の三名を害せしものにて謀殺罪を犯せし者也或は被告は飲酒の爲に精心を喪失したる可しこの論あれ共被告は長き間水夫に成り居りて平素酒を飲出せし止時なくと自身を明言せる處成已ならず種々の手段を以て末に名義人を迫りし處を見るも精神には異常無を知るに足らん十六日に飲しは蘇格蘭土産のホイスキーにてフレンチ、カアチスのいふ所にては十杯二杯も飲て異りなしを監獄にて手足の戦慄せるは酒を中止せし爲にして精神に異常あるに非ず故に末と秋とを殺害せるは帝國刑法第二百九十二條に該當し又他の一人ウオートは被告の憎しみ居しのみならず末と秋とを殺害するに付ての邪魔者也として殺したる也故に假令吐瀉の間ウオートを殺したりとするも斯る

場合には謀殺を以て論すへきは刑法の定むる處況ん故被告は豫じめ謀つてなしたるに於てれや被告が末と秋に立退を命せられしは被告自身に悪き處あれば敢て情状と酌量すへき譯なし且本件は三罪俱發のものなれば本職は死刑の宣告有ん事を望むと述たり時に正午を過る十五分休息せり

第 廿 三 席

ミルラーの刑に付ましては多少議論か有まして死刑では無ろう無期徒刑で有るイ、や徒刑は有期で有るう米國たけにオーストリアイでは無かといひましたか檢事は死刑を望みましたは當然で有升午後二時十分再び開庭すれば午前非さし牧野辯護も東京より來りて着席したり裁判長は小林通譯をして午前に於る檢事の論告を通譯せしむ其論告中に加害者は被告ある事死刑を

百七十四

請求する事に到りては満身の肉痛き或は顎骨の邊を蹴動する様  
 頗る平らかなる能わす通譯了りて 判檢事の諭告に對しては被  
 告は自ら辯護する所は無か 三今はいふ事なし後に述べん是  
 に於て裁判長は辨護士をして辨論に移らしむ牧野磯雄氏先つ立  
 つて 故條約實施と同時に起りたる本件は大に内外人の耳目を  
 聳動せしめ外人は本件の裁判如何により我國の司法制度に於け  
 る信用の程度を定めんとする物なれば最慎重を加へざるへから  
 す今豫審以後の調書に付き仔細に之を檢するに恰も探偵小説の  
 如きにして事實の真相を得る事極めて少し而も證人の或者の如  
 きは故意に被告を陥れんとするか如き形迹ありて容易に判断を  
 下し難き物あり當辨護人は被告の其罪たる事を信すくと同時に  
 被告の極めて不幸なるを憐み被害者の却て幸福なる事を感せず  
 んはあらず抑被害者中の婦人は條約のまた實施されざるに當り

百七十五

我警察權の届かざる居留地に於て洋妾にあり有とらゆる既事  
 を働きたる者なりウオートは又居留地を徘徊せる無籍漢なり然  
 るに一朝慘殺に逢たるの故を以て多少天下の同情を引くに至れ  
 り又被告は本件の生ずると同時に滿天下よりして其下手人の如  
 くに見做され一人彼れの兇行を憎まざるはなし是寧被告の不幸  
 といふへき也随つて被告に對する證人の證言の如きは不利益の  
 事のみ多く法律上の直接證據の如きも亦一として具備したる所  
 なし犯罪の場處に在りたる物を取り來つて被告の處爲あるへし  
 と認定したるに過す現に調書の上に徴するも被害者ウオートが  
 ライジングサンイン方へ來りたるは何時なるか明かに知るを得  
 ざるに非ずや而してウオートが外國へ來たる時は被告か已に長  
 椅子の上に熟睡し田中留は淫賣の爲に他出せる後なるに非ずや  
 當辯護人は或はウオートが他人と相撓へて來りし後其者に殺さ

百七十六

れ其者は又外岡末等を殺して金子を奪ひ去りしに非ずや保る疑ひ有るものに對して直ちに被告の所爲也と斷定するは抑又誤りきらずや假に一步を譲りて被告の處爲ありとするも、ヤツ其他全部に血痕の附着すべき筈なるに其然らざるを見れば或は被告は何者にか殺され居たる末の傍らに寢たるが爲に其鮮血の附着したるやも知るべからず殊に證據物の、ヤツは被告が絕對に否認するにも係わらず淫賣婦の留が證言するのみにて留なる者は被告を陷害せんが爲に出廷したるかの如き觀あり此輩の言を採用するも又大に誤りといふべし假に是も被告の物とするも洗濯に遣りし物が血に塗れしには非ざるか證據物のナイフの如きも被告の所爲也と判定する價値なし當辯護人は最初に述べたる如く事件は極めて疑ひしき事のみ多くして事實の眞を窺め得たるものに非ざるを信するものなり而して儘に名義主たる事を附纏され

百七十七

たる婦人に對して感情を害したる位の事にて三人を殺害するに至るが如きは尤も疑ふべきの點といふべし元來寢食を忘れても尙は飲酒せんと欲する者なり多少の罵詈を加へられ冷遇を受くるといへ共、其甘んじて其嗜好を満すべし如何にするも三人を殺すが如き舉に出づる事なきは必せり又彼が石倉香太郎あるは末の情夫あれば其証言の信するに足らざるはいふ迄もなく被害者鈴木お秋は多少感情を害し居るにもせよ彼れはウオートの情婦あれば被告と何等の關係を生すへきに非ずされは被告の所爲とするも豫しめ謀るといふ事は何れの點に於ても發見するを得されは無論謀殺罪に問ふべき者に非ず……ト論して若席すれば高橋辯護士の辨論となれり其論旨は法律家の辨論といはんよりは政黨屋の演説といふやうな、第一に論して日裁列所は事件の檢證を鄭重になしたると同時に神速に結了せしめんとなし

たる考へ有しもの、如し是故に檢證は甚だ不十分なり檢事が  
 檢の際則ち十七日の朝には立會官更替ミルラーの處爲なるへし  
 どの疑ひを以て調べたる事は明らかあるも其他の方面に向つて  
 何等の取調へをなしたる所なし……ト猶進んで懸揣といふ事の  
 點に付いて事實に關して述ふる所あり猶續いて口を開き犯罪の  
 場處に於ける證據物其他に徴すればミルラーの處爲なるべしと  
 の疑ひの起るも又熟考すれば熟考する程疑問も又生じ爰し證人  
 なる田中留の性行は如何なるか留は末が金を持居たりといふ其  
 金に付ての申請は許可されず兇行者は賄物を得るの目的なるや  
 も知るへからず檢事は第一にウオードが殺され次に秋次に末と  
 論告するも末の無名指の切疵は銃槌の鐵にて出来る物に非す折  
 れたる剃刀が他の兇器ならざるへからず然るに剃刀はウオード  
 の屍体の下にありしといへば大に疑ふへきに非すや且又裁判

學に未熟なる醫師の鑑定は毫も信用するに足らざるなり其醫師  
 は被害者三名は殺されてより同じく十時間を出すといふに檢事  
 の必殺したる順序と知れるは大に疑ふ可し此點は寧ろ國手の見  
 る方判然すべきものに非すや檢事は又田中留の淫賣に出て行く  
 頃より被告が兇行の用意を爲したるが如く論告されたるも熟睡  
 せるミルラーが去る用意をさし得る物なるや……ト裁判長の注  
 告もありて……後言葉を嗣ぎて十六日の午前にはミルラーは指  
 輪を末に與ふると恠氣居たる事判然たれば檢事が十六日の朝殺  
 意を生じたりといふを打消すべき唯一の證據とすべし然れど茲  
 に困難あるは證據物なり多少皆ミルラーの物たらん併しながら  
 其當時の關係よりすれば或は酒の爲に精神狂ひて兇行に及びた  
 るものか夫共又或者は麻酔劑を用ひられ遂にミルラーが兇行を  
 遂げたるかの如く拵へられたるものか何れにしても本件にはい

まだ現われざる不思議の事實の伏在するに非ざるか兎に角被告に對する證據は不十分あるにより無罪の言渡しを望む假に被告の所爲とするも自性自發の狂氣として不論するべし……次に井上八重吉氏は立て曰く本件犯罪は果して被告の所爲たるや否や被告の所爲と認むべきは田中留セームスカアチスの證言と證據物に過す而してシャツに付てはカアチスの云ふ所尤有力なるが如くなるに被告自身の陳述する所によれば被告は現に若用する所のシャツを以て十六日には着て居たりしと主張するに由り其邊は被告の言を採用するを以て證據法の原則に適する物とせん田中留は被告と相反するもの其證言を採用するは被告に取りて酷も又極れりといふべし當辯護人は牧野高橋の阿辯護人の漏したる大二點を補足し更に全部に亘りて被告は全く罪跡なしと斷言する者なり被告は斯る兇行を遂けたりと假定すれば

是に對する原因無るへからず試みに問はん被告はウオートを殺害するに至るの原因あるは單にウオートが持て過を挨ひ位の際にて殺意の生すへき理由あり而も被告は主婦たる末を手に入居ればなり而してウオートは傭人たる秋に通し居る者其間權力に於て相違有る事勿論なり假に被告が兇行を遂けたりとするも全く狂氣の處爲のみ又秋は日本語を解せざる被告に向ひ日本語にて出て行けといひし迄にて殺意の起るへき筈あり又末に對しては名義主たるを謝絶されたるに由るといふも事實は末より被告に名義主たる事を依頼したるなり其間の關係にミルラの殺意を生すへき處を發見するに苦しむ者なり或は被告が氣の狂ひたる事ならんか檢事は被告の精神の確なる事カアチス方にて飲しウスキエーの醇良なるライオンマシンにて二杯飲しウスキエーにては氣の狂ふ事ありと論告せらるゝも寢食を断れども尙飲



んとする被告が酒場の傍らにありて少し斗りの酒に甘んずへきに非ず必ずや飲泥酔せしならん即ち其證據には被告が十八日の朝國手の診察を受けし時より大酒せし徴は十分に存在したりといへば或は酒狂の上になしたる犯罪には非ざるか彼の體格の如きも酒場より持参りたるなるへし而して便來の傍らに寝たりといふ被告の陳述は少しも變らずカアナス方に到りて酒を出されば強硬すといへるが如きも大きに精神の狂へるを知るべし而して狂人に近き所爲は是のみならず尋常見行者が罪狀を掩ふべきに反して血痕有ものを階下に置き去りて近傍あるカアナス方に眠るが如きは精神の狂へる好箇の證據に非ずや最前檢事が臨檢の際血痕のあるシャツを示されて何氣なく自分の物也と答へ後に血の付きたるに驚きて其言を打消すが如きは是又氣の狂へる證とすへし被告は酒に酔へば知覺精神を失なへる男なり知

覺精神を失ふへば犯罪の責任なし況や日本語を解せざる被告に録酒屋的の英語を解せる末との間に如何成問達の有しやも知れざるに於てをやされば被告の所爲と假定しても大に酌量を加ふへきものなり嗚呼波濤万里の異邦に参り言通せざる法廷に立ち僅に通辭を経て自己の意を申立る被告の胸中豈大に憐むべき物有に非ずや敢て裁判官の明察を望むと演せり最後に秋田辯護人は立てり條約實施後の本件殊に最も重大なる事件私は全く被告の無罪たるを主張する者而して是を四段に分つて論辨せん第一ミルラーの性行第二原因及び意志第三證據第四法律上の理論なり第一ミルラーの性行檢事は被告を憐れなりといひ殘酷對忍暴戻ありといひ冒頭に被告の性行を斷定せり然らば是に對する證據を擧げざるへからず然るに其證無は盲瞽も又甚しといふへしまた何人の所爲か到底せざるに當り被告の性行を檢

定するは非也假し被告の所爲とするも猥りに其性行を残忍暴行  
 極悪なりといふを得ず然も本國にてはまた刑を受たる事非すと  
 はシドモール證言する所あらすや水夫が酒を飲て暴れたれば迎  
 直ちに残忍極悪の性行なりと断定すべからず被告人が人殺しの  
 經歷ありといふは田中留の口より云しものを以てミルラーの性  
 行と定むるの材料と爲すに足らざる也第二原因及び意志外岡本  
 に對する殺意の原因に付ては檢事は營業名義の取消及び被告に  
 退去を命したりといふにありと論告するも是等の事が殺人の  
 原因となりし理由を見出す能わす末は被告を愛するの結果性ホ  
 あるにも係わらず被告と交り居たる事あれば營業名義を被告に  
 あさんとせしは當然あらん後に至りて名義を換へる事に成しと  
 未より被告に通せされば之が兇行の原因となるべき筈を以し又  
 告に退去を命したりとは田中留の證言の外元より取に足らす云

來末は表面館酒屋あるも其實は外國の水夫を合手にする淫館屋  
 なり故に店頭に酔ふたる客のあると厭ひて被告に向つて他へ遊  
 ひにゆけどでもいし事あらん其一言か兇行の原因とはならず  
 又鈴木秋に對する原因は檢事は秋がミルラーに向ひ末方を用よ  
 と迫りしに依れりと論告するも是も田中留の證言にして信す  
 るに足らず日本語と解せざる被告が是にて殺意を生ずるか如き  
 事有へけんや且ウオートに對する原因は檢事か嫉妬心にありと  
 論告するも被告を相知らざる間柄にして嫉妬を起すへき理を  
 し原告留のいふ所によれば末方の女共がウオートを待遇する事  
 被告の上にも有より遂に被告の嫉妬を生ずるに至りしとの事なれ  
 ど決して去る事の有へき筈を以しウオートは好男子也金持也道義  
 りに之を嫉むの理由有ざる也ウオートは末方を愛ひしに非ず離間  
 せんとせしにも非ず如何なる點より見るも被告が殺意の生ずる

の理由を見出す能はず斯の如く其原因なく隨つて意志なきにも  
拘わらず常被告事件は起つたり假に被告の爲なりとするも正  
氣の沙汰に非ざるを知るべし後に述ん第三證據此殺人事件は一  
の直接證據なく皆情況證據のみなれば探證法中の最も危険なる  
物也是に對する斷罪は最も注意を加へざるへからず疑はしき證  
據物に依り被告を以て本件の大罪人と断するは益々危険を  
せずんばあらず而して檢事の珍重する田中留の証言は毫も信用  
するに足らざる物已彼の位置を見よ彼は淫賣を専業とせる末大  
の雇人にして我國の下等動物なれば殆ど公庭に証言する資格な  
きもの也彼は豫審判事に對し十六日の夜淫賣に赴きたる件の隙  
述に付將に偽證罪に陥いらんとしたる事あり加之ならず留はミ  
ルラーに惡感情を抱き居るか故に本件をミルラーの所爲と懸信  
し一面には主人の仇朋友の敵と惡心を以て其陳述偏頗に傾き全

く公平の証言を得る事難し況や淫賣を専業とせる下等動物ある  
に於てをや其証言元より信するに足らず證據物中にあるシャツ  
は被告之を認めず田中留の証言のみセームス、カーヘスは被告の  
シャツに似たりといふに過ぎず水兵のシャツの如き一々仕立屋  
に注文するが如き事をなさす出来合を買來りて着用する事なれ  
ば之を以て被告の罪を斷するの證據とするは極めて酷也又鏡  
の天窓と柄にて三人を殺せりとの事也成程此鏡は十分人を殺  
すに足るも三人を殺すのは今少し多くの血痕の附着せざる可  
らず故に取りて證據とするに足らず又オボンも留とカーナスが  
着用品に似たりといふのみ而して被告は十六日の夜黒色のオボ  
ンを穿き居たりといへば是又證とするに足らず又帽子上着に血  
痕あるも之のみにて罪續を證するに足らず水兵の事何へ如何な  
る仕事にて血痕の附着せしかも知れず殊に被告は當夜熟睡せし

事件の如何のウオートと殺せし時、血の飛しやも知れず又副刀は  
証の証となるや判然せず検事の論告さるゝは此犯罪を證するに  
何等の假直なし益に至りては説明を要せず私しは更に進んで被  
告の利益とあるべき證據を擧ぐ可し當夜被告は被告の用意を爲  
したりとすれば寢すして精神確乎たらさるへからず然に犯行の  
場處に種々の證據となるべき品を殘し置きたりとするれば余程  
あり而して此罪を犯したる後夜の明るを待ち悠々隣家に行き  
を求むるか如きは尋常犯罪者の爲すべき所に非ず斯く論して  
れは總ての情況證據は何も皆薄弱のものなり假に被告の處爲と  
するも實行の時於て知覺精神を失いたるならん則ち日本製の  
ウスキュー二瓶を傾け精神に大に異狀を來したる結果辨別心を  
失ひしに依るならん而して被告の頭部の古疵は時によりて頭痛  
を起すといへば惡制のウスキューにて腦を刺殺したるを證する

に足るへし又臨檢調書と醫師の鑑定書とに依れば其死体の慘狀  
極まる事を知る如何なる意趣遺憾あるも斯る醫驗の事の出來得  
る物に非ず之を敢てしたる者の精神の常ならざるも又以て證す  
へき也又十八日監獄にて診察を受けし時眼球に充血あるを認め  
しといへば多量に飲酒せし結果アルコール中毒を起し居たる出  
を可知し彼の日本製のウスキューに付ては會て分析を申請する  
所有しも許可されず被告のため司法制度のため益々遺憾とする  
所なり尤も常裁判所は辯護人の申請なくとも精神錯亂を認めは  
らるゝといへば深く論する限りに非ず第四法律上の理論本件居  
極めて疑はし疑はしきは之を糾せず是法律の原則なり假に被告  
の處爲とするも臨酌の結果精神の上は辨別心を失ひたるもの固  
より罪となるべき理なし又罪を犯すの爲に飲酒したりとす  
るも實行の時已に精神の錯亂するに於ては是又論すへき者に非